# 田原本町埋蔵文化財
# 調査年報
2000年度

10

2001

田原本町教育委員会

# 例　　言

1．本年報は、田原本町教育委員会が2000年度（平成12年度）に実施した発掘調査及び工事立会・試掘調査の略報である。発掘調査については、別途、その概要報告書を作成中である。

2．発掘調査は、本文第2表にまとめたように受託事業については原因者に、国庫補助事業については土地所有者に多大な理解と協力を賜った。

3．本文に記された遺構の記号については、ＳＤが溝、ＳＫが土坑または井戸、ＳＲが河跡を表す。

4．遺物量は、幅34cm、奥行き54cm、深さ15cmのコンテナに収納した際の箱数である。

5．本文で記載された弥生土器の時期は、藤田三郎・松本洋明1989「大和地域」『弥生土器の様式と編年　近畿編Ｉ』（木耳社）による。

6．調査・遺物整理にあたっては、石野博信、今津節生、奥田　尚、金関　恕、河上邦彦、肥塚隆保、佐原　真、辰巳和弘、玉城一枝、寺澤　薫、樋口隆康、福永光司、森　浩一、山田慶兒諸氏より多大なご教授を賜った。記して感謝の意を表します。

7．本文の執筆は、各調査担当者である清水琢哉、豆谷和之、藤田三郎が執筆し、編集は藤田がおこなった。

# 目　　次

Ⅰ．2000年度の調査概要 …… 1
Ⅱ．発掘調査の概要
（1）唐古・鍵遺跡　第79次調査 …… 5
Column 1　ムラを囲む大環濠 …… 6
Column 2　大鉢を利用した集水施設 …… 7
（2）唐古・鍵遺跡　第80次調査 …… 8
Column 3　区画溝とガラス大玉 …… 9
Column 4　ヒスイ勾玉を入れた褐鉄鉱容器 …… 10
（3）唐古・鍵遺跡　第81次調査 …… 11
（4）唐古・鍵遺跡　第82次調査 …… 12
Column 5　木器貯蔵穴に棄てられた弥生前期の土器 …… 13
（5）唐古・鍵遺跡　第83次調査 …… 14
Column 6　ムラ東南部を囲む環濠群 …… 15
（6）羽子田遺跡　第19次調査 …… 16
Column 7　木製農工具を多量投棄した井戸 …… 17
（7）保津・宮古遺跡　第27次調査 …… 18
Column 8　井戸から出土した中世の生活用具 …… 19
（8）法貴寺斎宮前遺跡　第３次調査 …… 20
Column 9　土馬、穿孔土師皿と斎宮神社（寺） …… 21
（9）法貴寺北遺跡　第２次調査 …… 22
(10) 千代遺跡　第３次調査 …… 23
(11) 宮古北遺跡　第11次調査 …… 24
(12) 法貴寺遺跡　第２次調査 …… 25
Column10　近世民家の成立と変遷 …… 26
Ⅲ．工事立会・試掘調査の概要 …… 27
（1）唐古・鍵遺跡の立会1 …… 29
（2）唐古・鍵遺跡の立会2 …… 30
（3）唐古氏居館推定地の立会 …… 31
（4）清水風遺跡の立会 …… 32
（5）小阪里中遺跡の立会 …… 33
（6）保津・宮古遺跡の立会 …… 34

# Ⅰ．2000年度の調査概要

本町が実施した2000年度（平成１２年度）の発掘調査は、12件である。昨年度が21件であったことからすれば、半減したことになる。しかし、内容的には昨年度の調査では１日～３日で終了した短期の調査が７件あるため、実質的な件数としてはほぼ同じぐらいである。ここ数年の実質的な件数とすれば、15件前後に落ち着いており都市部の経済不況による落ち込みとは異なり、あまり関係なく底辺的状況とみられる。このような発掘調査と別に、公共下水道工事に伴う唐古・鍵遺跡内の工事立会が4月から6月まで続き、職員のリスクは甚大であった。

さて、本年度12件の調査の内訳は、公共事業に伴うもの５件、民間開発に伴うもの２件（うち重要遺跡認定に基づく調査1件）、唐古・鍵遺跡の範囲確認調査2件、個人住宅等建築に伴う調査3件である。このうち、唐古・鍵遺跡の調査が５件あり、実労働的な比重は相変わらず高い。また、遺物量も800箱を越えており、応急処理的な整理のままである。このような状況のため、その全容については把握しえないが、概要をまとめておく。

本年度の成果は、弥生時代から近世まであり、時期別に述べる。

**弥生時代**　弥生時代では、唐古・鍵遺跡の調査成果が大きい。第79次調査ではムラの北西側を囲む環濠とその内側の居住区を、第83次調査では南東側を囲む環濠を検出した。また、遺跡南西部の下水道立会でも環濠を確認しており、これまでの環濠調査を総合すると、環濠がムラをほぼ全周することは確実となった。第79次調査で検出した竪穴住居群は、竪穴のみで構成されるもので掘立柱建物とは混在しない構成単位と考えられ、地区によって性格が異なる可能性がある。第80次調査は唐古池の南西側に位置し、居住区を区画したと推定される溝を検出した。その後、整理段階でヒスイ大勾玉２個を入れた褐鉄鉱容器が出土していたことが判明し、溝の性格については再検討を必要とするようになってきている。
第82次調査では、弥生前期初頭の木器貯蔵穴群を多数検出し、本調査区付近がムラ内部でも最も早く定住した地区であることが再認識された。

唐古・鍵遺跡以外では成果が少ない。保津・宮古遺跡では、弥生時代前期の土器が散布する微高地の西側を調査したが、遺構遺物は疎らであった。本遺跡が弥生時代の拠点集落としての位置づけはきびしい状況である。

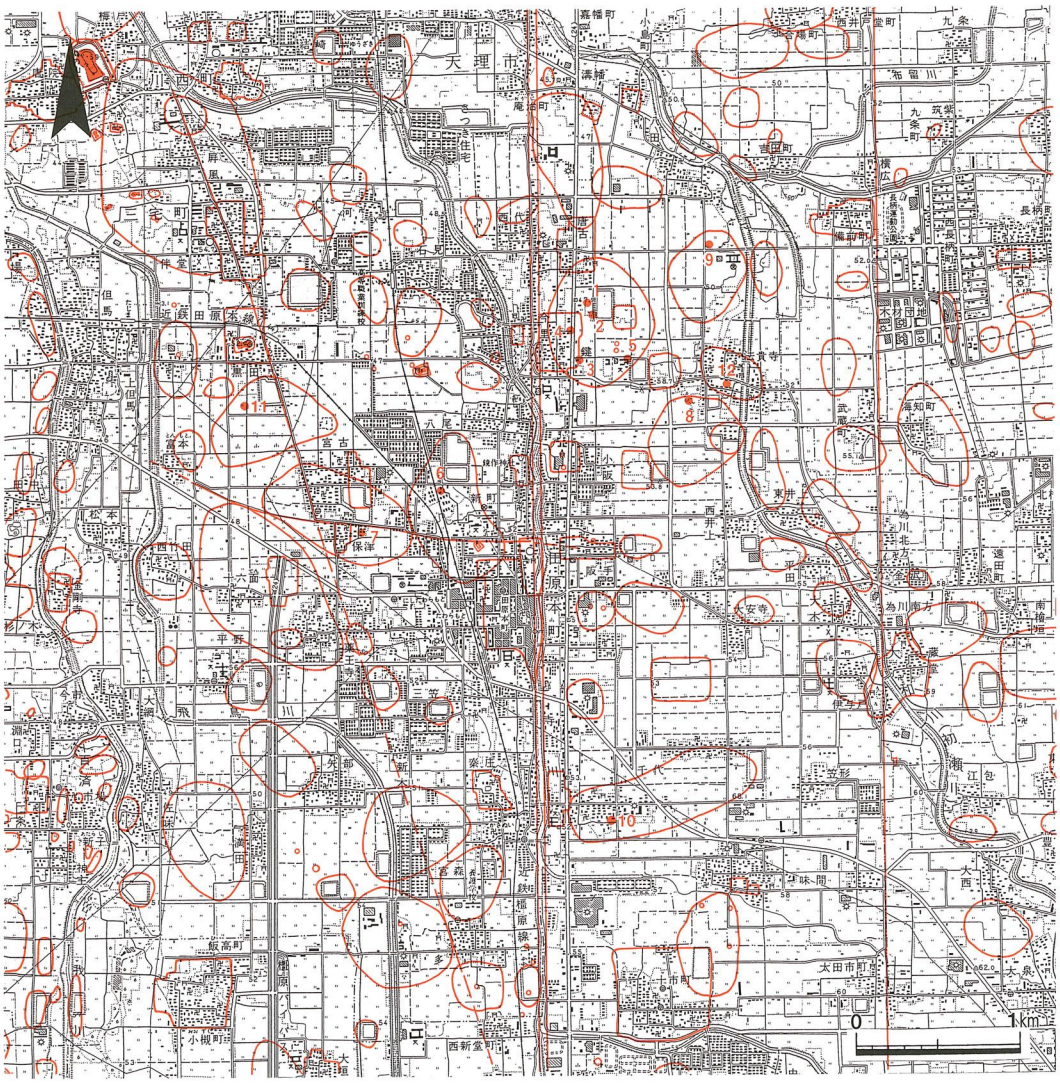
**古墳時代**　羽子田遺跡第19次調査では、古墳時代前期の大型井戸を検出し、多数の木製農具が出土した。この時期の農具のセットを考える上で良好な一括資料を提供した。羽子田遺跡は庄内から布留式の遺構遺物が散在する状況で、今回の井戸の性格を含め、遺跡の性格を考える必要がある。

法貴寺斎宮前遺跡では、古墳時代後期から古代にかけての河跡を検出した。遺物を多く含む河跡であることから上流に位置する法貴寺舞ノ庄遺跡や下流の唐古・鍵遺跡との関連が考えられよう。古墳では、唐古・鍵遺跡で削平された方墳２基の周濠を検出した。これまでの調査を総合すると唐古・鍵の弥生集落の上に５世紀から６世紀の中小規模の古墳が相当数築造されていることが判明しつつあり、低地部の古墳分布状況も再認識する必要が生じている。

**古代**　古代の遺跡調査の成果は、本年度はあまり見られない。わずかに前述法貴寺斎宮前遺跡で河跡から古代の土器が出土しているのみである。ただし、工事立会においては、保津・宮古遺跡内に重複する所で、筋違道の道路側溝らしき遺構を確認した。これが推測どお

**表１**　田原本町における埋蔵文化財発掘届・通知一覧表

| | 発掘届<br>57条の２ | 発掘通知<br>57条の３ | | 発　掘 | 試　掘 | 立　会 | 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 2000年度<br>(平成12年度) | 22 | 5 | 通知文 | 14 | | 13 | 27 |
| | | | 実施分 | 12 | 0 | 16 | 28 |




田原本町の遺跡と調査地点

**表2　2000年度発掘調査一覧表**

| | 遺跡名 | 調査次数 | 調査地 | 原因者 | 原因 | 調査期間 | 調査面積 | 時期 | 調査担当 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 唐古・鍵 | 第79次 | 田原本町唐古106.107-1 | 田原本町 | 範囲確認 | 2000. 8. 16～12. 21 | 270㎡ | 弥生 | 豆谷和之 | 国庫補助事業 |
| 2 | 唐古・鍵 | 第80次 | 田原本町唐古116-1.117-1.118 | 田原本町 | 範囲確認 | 2000. 10. 16～01. 1. 24 | 72㎡ | 弥生 | 豆谷 | 国庫補助事業 |
| 3 | 唐古・鍵 | 第81次 | 田原本町鍵271-1北側道路 | 田原本町 | 下水道の立坑建設 | 2000. 10. 30～11. 6 | 3㎡ | 弥生・中世 | 清水琢哉 | 下水道課 |
| 4 | 唐古・鍵 | 第82次 | 田原本町鍵309-1 | 田原本町 | 店舗建築 | 2000. 11. 13～01. 1. 31 | 237㎡ | 弥生・古墳・中世 | 藤田三郎 | 国庫補助事業(重要遺跡認定) |
| 5 | 唐古・鍵 | 第83次 | 田原本町鍵184-2他東側道路、192-1南側道路 | 田原本町 | 道路の改良 | 2001. 1. 18～3. 7 | 180㎡ | 弥生 | 豆谷 | 建設課 |
| 6 | 羽子田 | 第19次 | 田原本町八尾675-1他 | 竹村興産 | 分譲住宅の建築 | 2000. 4. 24～5. 10 | 142㎡ | 古墳 | 豆谷・清水 | 受託事業 |
| 7 | 保津・宮古 | 第27次 | 田原本町保津96 | 増田善佑 | 個人住宅の建築 | 2001. 3. 12～3. 23 | 65㎡ | 弥生・中世 | 清水 | 国庫補助事業 |
| 8 | 法貴寺斎宮前 | 第3次 | 田原本町法貴寺1596南側水路 | 田原本町 | 水路の改修 | 2001. 1. 22～2. 8 | 105㎡(本調査47㎡) | 古墳・中世・近世 | 清水 | 産業振興課 |
| 9 | 法貴寺北 | 第2次 | 田原本町法貴寺1283-1他東側道路 | 田原本町 | 道路の改良 | 2000. 12. 12～01. 1. 10 | 113㎡ | 弥生・中世 | 清水 | 建設課 |
| 10 | 千代 | 第3次 | 田原本町千代1196 | 平井綱一 | 個人住宅の建築 | 2000. 1. 16～1. 19 | 19㎡ | 中世 | 清水 | 国庫補助事業 |
| 11 | 宮古北 | 第11次 | 田原本町黒田195-1西側道路 | 田原本町 | 道路の改良 | 2000. 11. 7～12. 1 | 245㎡ | 中世・近世 | 清水 | 建設課 |
| 12 | 法貴寺 | 第2次 | 田原本町法貴寺491-1 | 森口　淳 | 個人住宅の建築 | 2000. 5. 30～7. 4 | 84㎡ | 中世・近世 | 清水 | 国庫補助事業 |

りであれば第14次調査の成果と合わせ、筋違道の道路遺構を初めて確認できたことになる。いずれ、調査において追認する必要があろう。

**中世・近世**　保津・宮古遺跡第27次調査は、保津環濠集落の東側であったが、鎌倉から室町時代の井戸などを検出した。このことは、現環濠集落の成立とその範囲について再考する資料を提供した。法貴寺斎宮前遺跡や法貴寺北遺跡においても中世土器が多く出土しており、近隣に中世屋敷跡あるいは寺院関係の遺跡を想定できるようになってきた。千代遺跡では現八条集落内での小規模な調査であったが、中世末の大溝を検出し、集落の形成過程を考える上で貴重な資料を得ることができた。また、法貴寺遺跡は中世末から近代にかけての屋敷変遷をとらえられる建物遺構等を検出し、民家の様相を把握するうえで重要な調査となった。

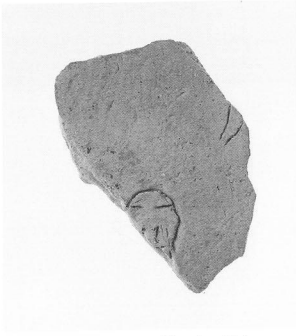
（藤田）

唐古・鍵遺跡の航空写真と調査位置（平成12年度分）

弥生前期壷（82次）

東海系壷（79次）

鐸形土製品（80次）



人物絵画土器（83次）

# Ⅱ．発掘調査の概要

## （1） 唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡 第79次調査

**所 在 地**　田原本町大字唐古字い子田106、107－1
**調査原因**　範囲確認調査
**調査期間**　2000.8.16～12.21

**所 在 地**　約270㎡
**調査原因**　230箱
**調査期間**　豆谷和之

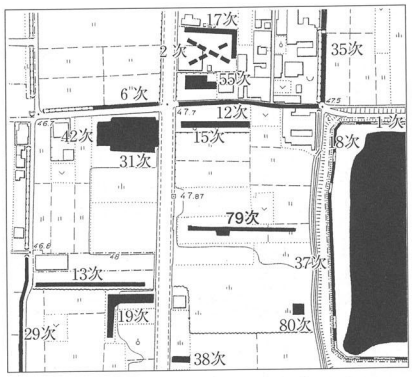
**位置・環境**　唐古・鍵遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する弥生時代を代表する環濠集落である。その占有面積は約30万㎡に達する。

今回の調査地は、遺跡範囲の北西側にあたり、周辺部では過去に第13・15・19・31・42・37次の６件の調査が行われている。これらの調査から本調査地では、東側で微高地の居住区、西側で環濠が検出されると予想された。

**検出遺構**　弥生時代前期：土坑２基
弥生時代中期前半：環濠１条、溝１条、土坑１基
弥生時代中期中葉：環濠１条、溝７条、土坑22基
弥生時代中期後半：環濠１条(再掘削)、溝２条、土坑７基
弥生時代後期前半：溝１条、土坑５基
弥生時代後期後半～古墳時代初頭：溝１条、土坑３基

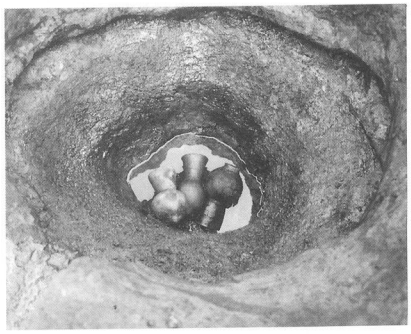
**出土遺物**　弥生時代中期後半の大環濠から、四脚器や組み合わせ高坏などの木製品が出土した。弥生時代中期後半から後期にかけての井戸が多数検出され、完形土器をもつものもあった。特に、弥生時代後期前半の井戸ＳＫ－120の下層からは、完形の長頸壷が６点出土している。その他、本調査地出土の特殊な遺物として、銅鏃や完形の東海系壷などがある。

**ま と め**　今回は、当初の予想通り西側環濠と東側微高地上の住居遺構を検出することができた。弥生時代中期前半段階の環濠が、より外側の弥生時代中期中葉の環濠へと付け替えられ、埋没し居住区へと変化していく状況が明らかになった。



1．調査地点の位置（１：5,000）

2．調査地全景（西から）


3．後期井戸遺物出土状況（北から）

Column 1

唐古・鍵遺跡
第79次

## ムラを囲む大環濠

唐古・鍵遺跡第79次調査の西端で検出したＳＤ－101は、集落の居住区と環濠帯を区画した、弥生時代中期の大環濠である。東北東－西南西に走行し、幅約８ｍ、深さ約1.2ｍの規模をもつ。溝断面は、逆台形を呈する。掘削は大和第Ⅲ－１様式であるが、大和第Ⅲ－３様式に再掘削されている。大和第Ⅳ様式の土器を含んだ堆積土で埋没するが、中央は窪地になっていたらしく、それをさらえた小溝が大和第Ⅴ様式(後期初頭)まで機能していたと考えられる。第13次調査のＳＤ－06や第19次調査のＳＤ－204と同一環濠であろう。

このＳＤ－101から13ｍほど集落内側で、弥生時代中期前半の環濠ＳＤ－102（幅約3.6ｍ、深さ約1.4ｍ）を検出した。このＳＤ－102は、ＳＤ－101の掘削後に埋没し、その上面が弥生時代中期後半の居住区となっている。遺跡北西部では、居住区の拡大に伴い、環濠が外側に付け替えられたと考えられる。なお、ＳＤ－101からは、人骨頭頂部片が出土している。これは、弥生時代中期前半までの墓域を、大環濠ＳＤ－101が断ち切ったことによって混入したものと想定される。

Column 2

唐古・鍵遺跡
第79次

## 大鉢を利用した集水施設

集水施設とは、崩れやすい砂層を掘り込み、大形土器を枠にして湧水を集めた遺構である。これまでに唐古・鍵遺跡では、弥生時代前期から中期後半まで、計７件の集水施設を検出している。

今回、第79次調査で検出した集水施設は、調査区中央にあるＳＤ－103が埋没する過程において掘り込まれ、大形鉢形土器の底を打ち抜いて、枠として据えていた。大形鉢形土器は、口縁部に２条の凸帯を貼り付けたもので、大和第Ⅲ－３様式に位置づけられる。

さて、集水施設が掘り込まれていたＳＤ－103は、弥生時代中期中頃に掘り込まれた小溝群の集合体である。おそらく、微高地にある居住区の汚水を集め、環濠に排水していたものと考えられる。集水施設が排水溝に掘りこまれることは、相容れない行為であるが、ＳＤ－103は砂層を掘り込んでおり、その掘削によって弥生人は湧水を認知したのであろう。

こういった溝の掘削によって砂層を確認し、そこに集水施設を設置するというのは、第19次ＳＸ－202、第69次ＳＫ－1130の例があり、特異なものではない。集水施設にこのような類型があるとするならば、飲料用の井戸とは違った水の利用を考えるべきかもしれない。

# （2） 唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡 第80次調査

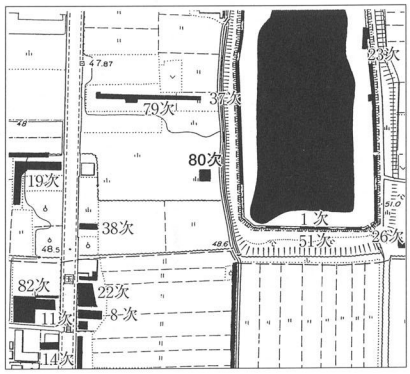
**所 在 地**　田原本町大字唐古字い子田116-1、117-1、118
**調査原因**　範囲確認調査
**調査期間**　2000.10.16～2001.1.24
**調査面積**　100㎡（実質72㎡）
**担 当 者**　豆谷和之
**遺 物 量**　215箱

**位置・環境**　今回の調査地は、遺跡範囲の北西側にあたり、前述の第75次調査地からは南へ約60m離れている。周辺では、唐古池西堤で第37次調査が行われている。その第37次調査では、遺構の密集する微高地と、その南側で弥生時代中期後半の砂層で埋没する大きな落ち込みを検出している。

**検出遺構**　弥生時代中期中葉　：溝３条以上
弥生時代中期後半　：溝１条
弥生時代後期前半　：溝３条
弥生時代後期後半　：小溝２条

**出土遺物**　弥生時代中期後半の溝から、完形の無文広口壷とヒスイ勾玉入り褐鉄鉱容器が出土。この溝を再掘削した弥生時代後期初頭の溝から、ガラス大玉片、ヒスイ勾玉１点出土。また、その上層からは、完形品を含む弥生時代後半の土器が多数出土した。

**ま と め**　今回の調査では、微高地を切って北東－南西に走行する小溝群を検出した。小溝群は弥生時代中期中葉に掘削が始まり、わずかに位置を変え再掘削が繰り返される。弥生時代中期後半には、この溝群より若干西側に位置をずらして小溝が再掘削される。この小溝は、弥生時代後期初頭の再掘削を経て、弥生時代後期後半まで継続する。弥生時代後期後半には、完形品を含む多くの弥生土器片が廃棄され埋没する。これらの小溝群の性格は、竪穴住居跡など居住関連施設の排水を集め、微高地から環濠へ流す役割が考えられる。褐鉄鉱容器が出土したことで地区の性格も再考する必要がある。



1．調査地点の位置（1：5,000）

2．調査地全景（西から）

3．後期溝遺物出土状況（北から）

ガラス玉（約1/2）

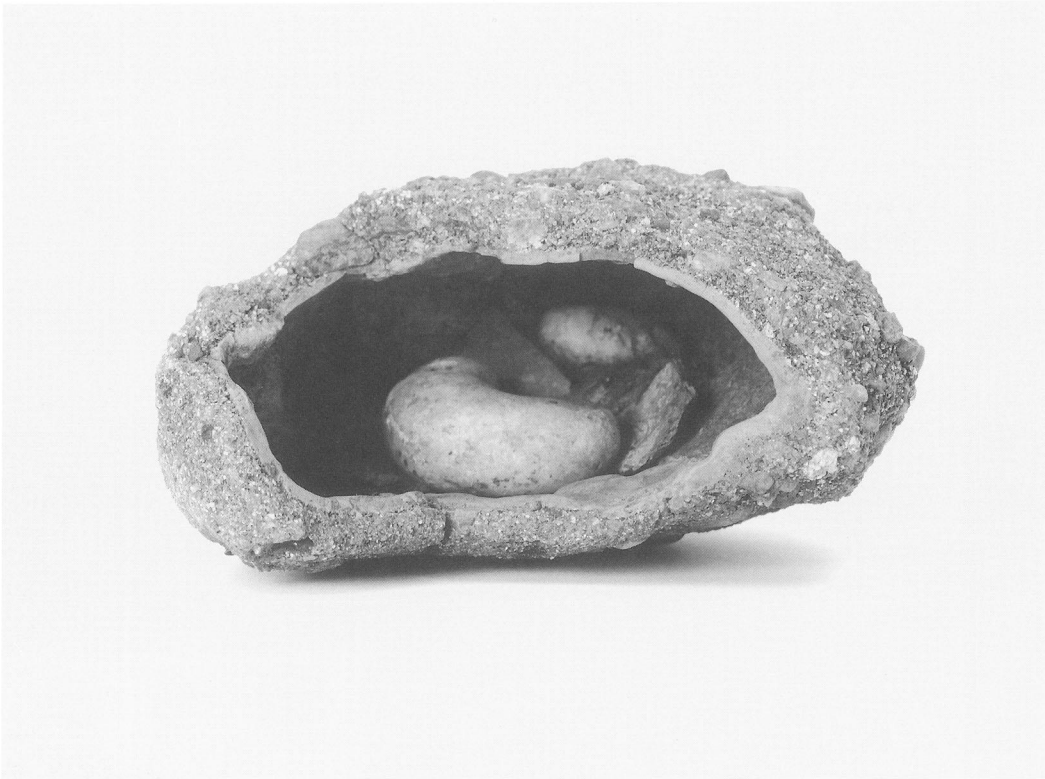
Column 3

唐古・鍵遺跡
第80次

# 区画溝とガラス大玉

第80次調査では、調査区の対角線上に沿って走行する北東－南西方向の溝群、ＳＤ－101･106を検出した。弥生時代中期中葉に掘削されたＳＤ－106は、幅１ｍにも満たない小溝が少なくとも３条（106Ｂ･106Ｃ･106Ｄ）は切り合い、遺構検出面においては幅約３ｍの大溝状を呈する。ＳＤ－101は、ＳＤ－106の西肩にその東肩を接するように平行して掘削された溝である。弥生時代中期後半に掘削され（ＳＤ－101Ｂ）、後期初頭の再掘削（ＳＤ－101）を経て後期終末に埋没する。なお、ＳＤ－101の東肩には、小溝ＳＤ－105が垂直に取り付く。

なお、ＳＤ－101下層とＳＤ－105から、大小３片のガラス大玉片が出土した。３片のガラス大玉は同一個体で、元は球状を呈すると考えられる。出土した土器から弥生時代後期初頭の年代が与えられる。ガラス大玉の大きい破片（写真左端）は長軸2.6cm、短軸2.2cm、厚さ1.5cm、重さ7.77ｇを測る。表面は、コバルトブルーと白色がマーブル状となる。内面は白色である。



Column 4

唐古・鍵遺跡
第80次

## ヒスイ勾玉を入れた褐鉄鉱容器

今回の第80次調査において、ＳＤ－101Ｂ最上層（弥生時代中期後半）から中空の褐鉄鉱が出土した。一端が打ち欠かれ、ヒスイ大型勾玉２個と土器片が詰められていた。

この中空の褐鉄鉱は、「鳴石」あるいは「鈴石」の俗称で呼ばれる。良質の粘土を核として周囲に鉄分が凝結し、その粘土が収縮することによりこの鉱物が生成されるのだという。これを振れば、収縮した粘土あるいは浸透した水が内壁にあたって、俗称通りに音をたてる。江戸時代の好物家はこれを珍重し、一端を打ち欠き花生けに用いたという。また、中国では「太一（乙）余粮」あるいは「禹余粮」と呼ばれ、薬として用いられた。盆地低地部の唐古・鍵遺跡周辺からは産出せず、奈良県内では生駒市と平群町の境にある鳴川付近と奈良市春日野付近の大阪層群の砂礫層にみられる。弥生人が、この鉱物に意図したことは明らかにし難い。しかし、この鉱物は山中に分け入り掘り出さなければ入手できない遺物である。このような鉱物にヒスイ大型勾玉２個が納められているような例はなく、そこに弥生人の精神世界の一端が垣間見えてくるかも知れない。

# （3） 唐古・鍵遺跡 第81次調査

**所 在 地**　田原本町大字鍵271-1北側道路
**調査原因**　下水道の立坑建設
**調査期間**　2000.10.30～11.6
**調査面積**　3 m²
**担 当 者**　清水琢哉
**遺 物 量**　3箱

**位置・環境**　本調査地は、第16次調査地の南側に隣接する。東南東約30mでは第44次調査・77次調査が行われている。16次調査では、北側に土坑・柱穴が集中し、南側にいくにしたがってやや低くなり、中期～後期には区画溝が掘削されていることが明らかとなった。この成果から、第16次調査地点が唐古・鍵遺跡西地区の微高地の南端である可能性が考えられた。一方、第44次調査地点は大溝や土坑が掘削されており、南地区の微高地がこの辺りから南東に拡がると考えられる。これらの状況から、本調査地は西地区・南地区の谷間にあたり、区画溝の巡る地点となることが予想された。

**検出遺構**　弥生時代中期中頃：溝1条
弥生時代中期後半～後期：溝1条
中　　世：溝1条
素掘小溝4条

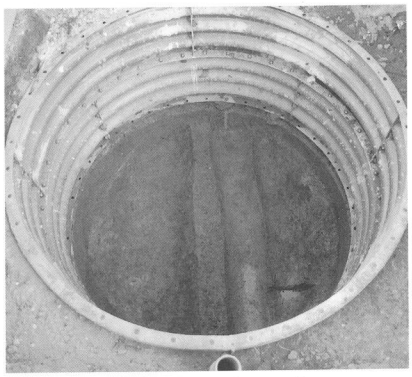
**出土遺物**　弥生時代中期の溝から弥生時代中期中頃（大和Ⅲ－1ごろ）の土器が出土した。また、弥生時代中期後半～後期の溝からは中期後半～後期（大和Ⅳ～Ⅴ様式）の土器片が出土した。

**ま と め**　狭小な面積での調査ではあったが、弥生時代の溝を2条検出することができた。調査地南側3分の2は中期の東西方向の溝で、北側3分の1が中～後期の西北西－東南東方向の溝である。

中世の東西方向の溝は、推定「唐古南」氏居館の内部を区画する溝である可能性が考えられる。

1．調査地点の位置（1：5,000）

2．弥生中期溝完掘状況（西から）


3．中世小溝完掘状況（西から）

# （4） 唐古（から こ）・鍵（かぎ）遺跡 第82次調査

**所 在 地**　田原本町大字鍵字垣内309-1番地
**調査原因**　店舗の建築
**調査期間**　2000.11.13～2001.1.31
**調査面積**　237m²
**担 当 者**　藤田三郎
**遺 物 量**　105箱

**位置・環境**　今回の調査地は、唐古・鍵遺跡の西部に位置するが、弥生前期段階の西地区のほぼ中央にあたる。また、推定「唐古南」氏中世居館の内部にも当たる。本地は既に1984年に範囲確認調査として敷地の一部を調査している。

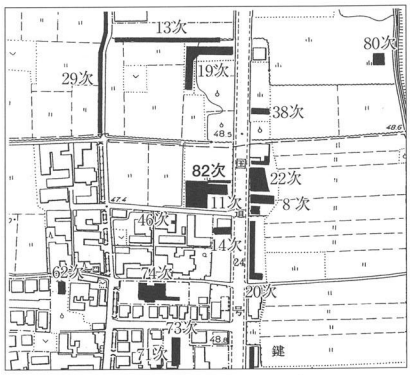
**検出遺構**　弥生時代前期前半：木器貯蔵穴多数
弥生時代中期：土坑、柱穴、井戸
小溝３条
弥生時代後期後半：井戸２基
古墳時代後期：方墳（周濠）２基
中　　世：大溝３条、土坑、柱穴
近　　世：素掘小溝多数

**出土遺物**　弥生時代のものとしては、多量の弥生土器や石器、木製品、ト骨がある。中期・後期の井戸からは完形土器が出土。古墳周濠からは円筒埴輪や須恵器等が、中世居館跡の大溝からは土師器、瓦器が出土している。また、柱穴には黒色土器椀２点が埋納されていた。

**ま と め**　今回の調査地は、唐古・鍵遺跡西地区の微高地にあたる。弥生前期の木器貯蔵穴が集中しており、木器生産の一つの中心地区であることが予想される。大和第Ⅲ-1様式には並行する２条の小溝を検出しており、区画溝あるいは道路遺構の可能性が高い。弥生中期後半以降は井戸等の居住遺構が散在している。

６世紀前半の古墳は、墳丘が削平され周濠のみを残す。規模は不明であるが、一辺10mほどの方墳と推定される。

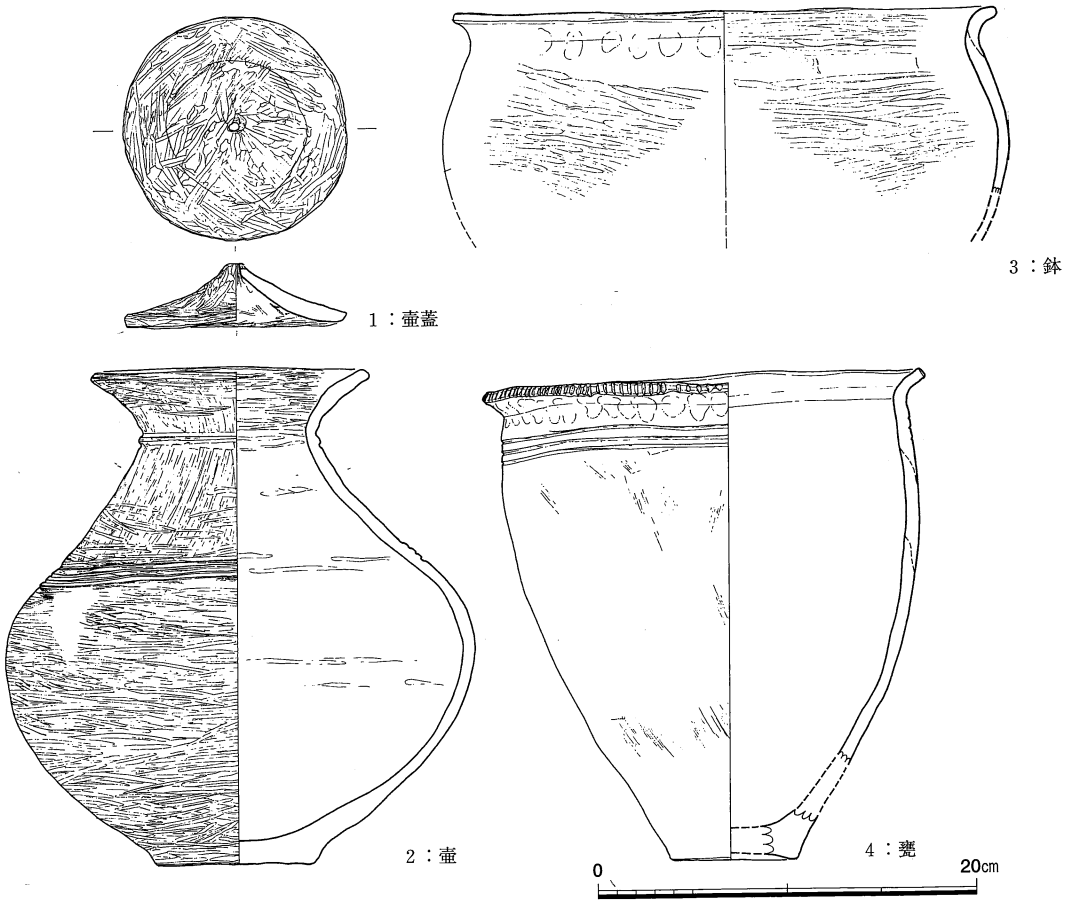
中世居館に関係する遺構としては、屋敷を区画する12世紀・14世紀代の大溝各１条、排水用の１４世紀代の大溝１条などがある。溝で区画された範囲はおおよそ30mである。



1．調査地点の位置（1：5,000）

2．調査地全景（東から）

3．土坑遺物出土状況（北東から）




Column 5

唐古・鍵遺跡
第82次

# 木器貯蔵穴に棄てられた弥生前期の土器

唐古・鍵遺跡の調査では、大型の土坑（穴）の底から農工具や容器の未成品、原材がよく出土する。このようなものは、弥生時代前期初頭から中期初頭にかけて見つかっており、一辺２～３ｍ前後の方形プランのものが多い。

今回の調査においても、多数の大型土坑が検出された。これらは重複関係が複雑で、何年にもわたって本地に掘削し、利用していることが判明した。それらの一つに、完形土器を投棄した土坑が存在する。この土坑は、調査区の中央北端で検出したものである。北半分は、第11次調査において既に調査されている。長軸４ｍ、短軸3.2ｍ、深さ1.4ｍを測る楕円形にちかい長方形プランの土坑である。土坑の西側は、砂層上に掘削しているため、壁面の崩落を防ぐため板杭を打ち込み、横桟をかまし補強している。土坑の中層には植物腐植土層が形成されており、この層から壺や甕などの完形土器が出土した。土坑は完掘していないが、木器を水漬け貯木しておくもので、そのまま放置され開口してところに土器を投棄したと推定される。これらの土器群は、前期初頭の数少ない良好な土器セットとなろう。

# （5） 唐古（から こ）・鍵（かぎ）遺跡 第83次調査

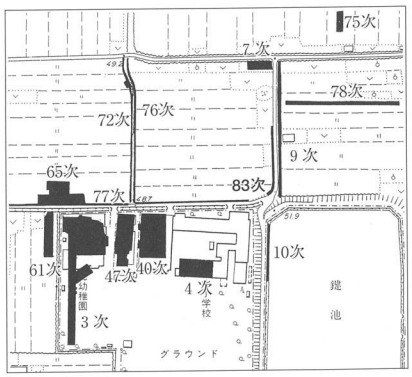
**所 在 地**　田原本町大字鍵184-2他東側道路他
**調査原因**　道路の改良
**調査期間**　2001.1.18～3.7
**調査面積**　180㎡
**担 当 者**　豆谷和之
**遺 物 量**　90箱

**位置・環境**　今回の調査地は、遺跡範囲の東南部にあたる。周辺部は、第40･47･72･75･76･77･78 次などの調査が行われ、唐古・鍵遺跡のなかでは比較的実態の判明している地域といえる。今回の調査地は、第40･47次調査で検出した遺跡南側環濠と第75･78次調査で検出した遺跡東側環濠の間にあり、調査の空白地であった。環濠の繋がりを知る上で重要な調査となった。

**検 出 遺 構**　弥生時代中期：環濠３条、溝１条
弥生時代後期：環濠３条、溝７条
壷棺墓１基
古墳時代初頭：溝１条、竪穴住居跡１棟

**出 土 遺 物**　調査区の最も西端の環濠上層から、弥生時代中期後半の土器とともに人物を描いた絵画土器出土。古墳時代の溝から、半完形の布留甕とともに、方柱状の砥石出土。

**ま と め**　第83次調査は、遺跡東南部における環濠の実態を明らかにした。弥生時代後期初頭には、確実に第40･47次調査で検出した遺跡南側環濠と第75･78次調査で検出した遺跡東側環濠は繋がる。さらには、その環濠が弥生時代中期前半まで溯る可能性が高い。弥生時代中期の環濠は、溝幅が約22mと広く下層には砂層が堆積するため、河川を取り込んでいたと想定される。河川は北流し、第１次(唐古池)調査で検出した北方砂層に繋がる可能性が高い。部分的に環濠へと合流し、遺跡の縁辺部に沿って流れる河川の状況は人為的である。運河的役割を担っていたのであろう。



1．調査地点の位置（1：5,000）

2．第１調査区全景（西から）

3．中期溝洪水層（北東から）

# ムラ東南部を囲む環濠群

第83次調査区は、道に沿ってＬ字状を呈する。第１調査区のＳＤ－1105と第２調査区のＳＤ－2105は、その遺物、規模、方向から同一環濠と考えられた。また、この環濠の検出によって、南側の第40次調査地から東側の第78次調査地まで、遺跡東南部を環濠が囲繞するその一端が明らかとなった。

ＳＤ－1105･2105は、先行する弥生時代中期溝を後期初頭に再掘削している。さらには、後期後半にも再掘削が行われ、古墳時代初頭に埋没する。ＳＤ－1105は第40次調査のＳＤ－102に、ＳＤ－2105は第78次調査のＳＤ－109に繋がると考えられる。

今回の調査により、唐古・鍵遺跡の東南部では、弥生時代中期から古墳時代初頭まで、継続的に環濠の巡っていることが確実となった。また、弥生時代中期の段階には、第１調査区付近で河川が合流していた可能性がある。

*Column* 6

唐古・鍵遺跡
第83次

# （6） 羽子田（はごた）遺跡 第19次調査

**所 在 地**　田原本町大字八尾字池ノ内675-1他
**調査原因**　分譲住宅の建築
**調査期間**　2000.4.24～5.10
**調査面積**　142㎡
**担 当 者**　豆谷和之・清水琢哉
**遺 物 量**　80箱

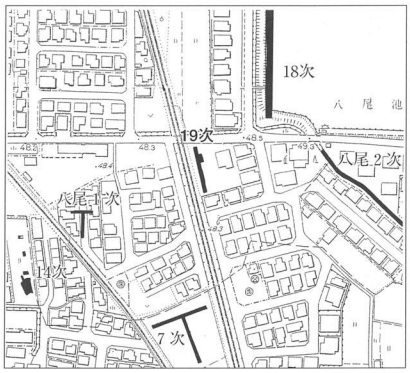
**位置・環境**　八尾池の南西にある住宅地で、分譲住宅の建築が計画された。本地は、羽子田遺跡の北西部にあたる。西隣接地の近鉄線は弁天ノ塚古墳推定地で、その敷設工事の際に鏡や馬具が出土している。地籍図には、東西に軸をもつ前方後円形とそれを囲む盾形の地割りが示されており、墳丘と周濠の痕跡を示すものと考えられた。今回の調査地は、前方後円形の東側、盾形地割りの頂部にあたり、古墳周濠の検出が期待された。

**検出遺構**　庄内期：大型土坑１基
布留期：土坑２基、小土坑１基
布留期の小土坑１基を除く３基の土坑は、いずれも井戸と考えられる。

**出土遺物**　庄内期の大型土坑からは、上層で炭灰とともに多数の土器片や木片が、下層で鋤・鍬など多数の木製農工具製品が出土した。布留土坑２基には、それぞれ底面直上に布留甕の供献が認められた。布留期の小土坑には、完形の布留甕、下半を打ち欠いた直口壷がつめられていた。

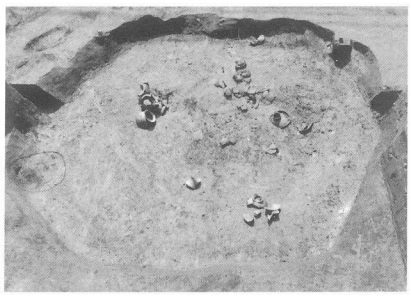
**ま と め**　調査区の北端に集中する庄内～布留の土坑を４基検出した。当初期待された、弁天ノ塚古墳の周濠は認められなかった。墳丘を示すと考えられる前方後円形の地割り自体は本調査地横の近鉄線のさらに西側であったが、周濠の範囲もまた本調査地までは拡がらないことが判明した。

幅のせまいトレンチ調査であるため予測にとどまるが、調査区南半では遺構を確認しておらず、庄内・布留期の集落は本調査区の北東部に広がる可能性が高い。



1．調査地点の位置（1：5,000）

2．調査地全景（北から）


3．井戸遺物出土状況（東から）

# 木製農工具を多量投棄した井戸

羽子田遺跡第19次調査では、庄内から布留期の土坑４基を検出した。このうち庄内期の大型土坑には、木製農工具が多量投棄されていた。庄内期の大型土坑ＳＫ－101は、長軸3.8m、短軸3.4mの隅丸方形の平面で、深さは検出面から約1.6mを測る。土坑の堆積土は、大きく上・中・下の３層に分層することができる。

中層の灰色系粘土層から、多数の木製品が出土した。その内訳は、用途がわかるものとして膝柄横斧柄１、膝柄縦斧柄１、平鍬身１、柄付平鍬４（うち泥よけ付２）、狭鍬１（平鍬転用？）、曲柄鍬身４（平鍬２・又鍬１・不明１）、曲柄鍬柄１、一木鋤３、用途不明柄５、横槌１、竪杵破損品１、木錘７（うち横槌転用１）、櫂？１、ヤス１、槽１、盤２（うち把手脚付１）、腰掛１、建築柱材４があり、他に多くの用途不明製品や加工木がある。これに完形あるいは半完形の庄内式併行土器が伴う。この状況は、土器小片が多い上層とは対照的である。

本土坑の本来の機能は、井戸と考えられる。炭灰とともに土器小片が出土する上層は、明らかに機能停止後に転用された廃棄土坑の様相を呈している。しかし、木製農工具が多量投棄された中層のあり方は、単なる廃棄土坑とするには躊躇を覚える。そこに、木製農工具を主体とした何らかの祭祀行為が見いだせるのかも知れない。

*Column* 7

**羽子田遺跡**
**第19次**

# （7） 保津（ほつ）・宮古（みやこ）遺跡 第27次調査

**所 在 地**　田原本町大字保津字中垣内96
**調査原因**　個人住宅の建築
**調査期間**　2001.3.12～3.23
**調査面積**　65㎡
**担 当 者**　清水琢哉
**遺 物 量**　15箱

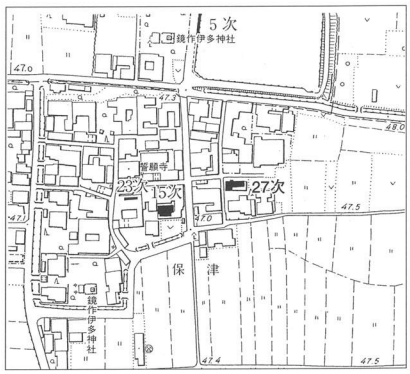
**位置・環境**　保津・宮古遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地し、縄文時代から近世の各時代の遺構が検出されている。遺跡南部には、中世以来の集落とみられる保津環濠集落があり、この内部で行われた第15次・23次調査では中世・近世の遺構を多く検出している。今回は、保津環濠集落の東に隣接する地点で調査を行った。

**検出遺構**　弥生時代：溝（土坑？）1条
中　　世：井戸3基、土坑3基
近　　世：素掘小溝多数

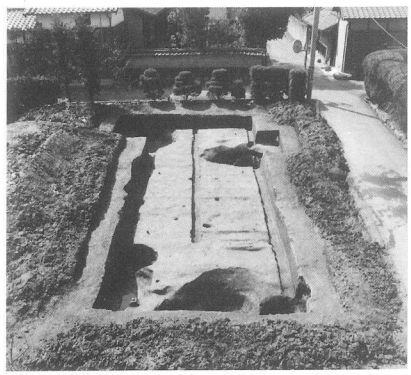
**出土遺物**　弥生時代とみられる溝の下層から木製容器1点が出土した。中世の井戸3基からは、それぞれ完形の土師皿・瓦器椀多数が出土した。

**ま と め**　調査の結果、弥生時代と11世紀～14世紀の集落関連の遺構を検出した。弥生時代の溝は、調査区外にも拡がるため長方形の土坑となる可能性がある。弥生時代の遺構は第15・23次同様、遺構密度は低い。

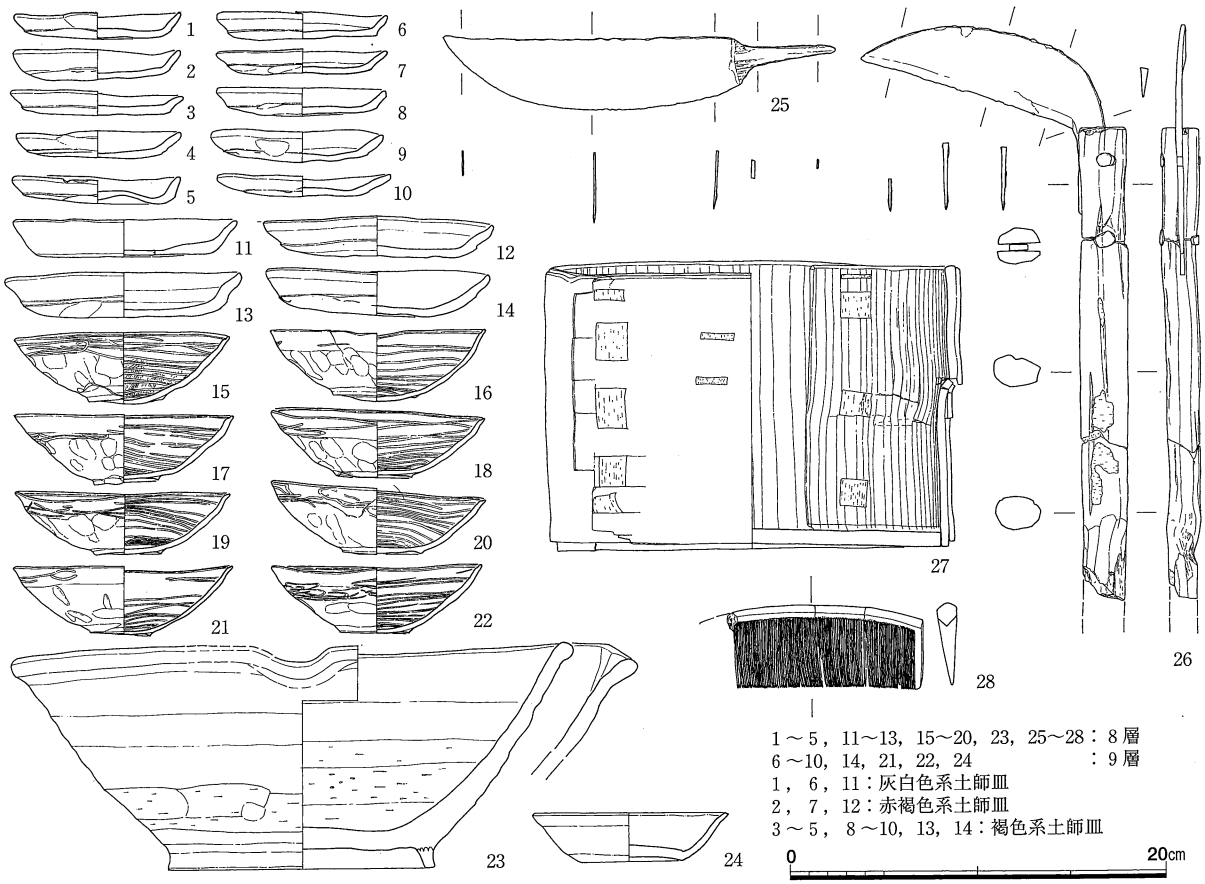
中世の遺構は11～14世紀のものであるが、11～13世紀の遺構には遺物が多量に含まれるのに対し、14世紀の遺構にはほとんど含まれない。このことは、調査地が屋敷地として利用されたのは主に11～13世紀であることを示す。保津環濠集落の成立以前の集落が、本地を含め東側の微高地に拡がっている可能性が高い。



1．調査地点の位置（1：5,000）


2．調査地全景（東から）

3．井戸遺物出土状況（西から）




# 井戸から出土した中世の生活用具

鎌倉時代の井戸ＳＫ－５１からは、土器をはじめとする多数の遺物が出土している。ここでは下層（８～９層）出土遺物の一部を示す。

１～10は土師小皿、11～14は土師中皿、15～22は瓦器椀、23は常滑系の片口鉢、24は中国製の白磁小皿である。25の包丁は柄の痕跡が残る。26の鎌は柄を含めてほぼ完形で出土している。27は円形曲物容器、28は横櫛である。

土師皿の色調は、褐色、赤褐色、灰白色の３種類がある。褐色と赤褐色の土師皿には口縁部を外反気味に仕上げるものと内湾気味に仕上げるものの２種がある。灰白色の土師皿は基本的に外反気味に仕上げているが、端部に面取りをしているものが目立つ。

出土した瓦器椀は、見込みと口縁部内面に１連の渦巻き状ミガキ調整を施すこと、外面上半部のミガキが簡素であることから、川越編年第Ⅲ段階D型式に相当すると考えられる。なお、８層の瓦器の一部は高台が下底部より上位にはりつけられている（15・16）。９層の瓦器椀にはみられない特徴であり、若干の時期差を示すものかもしれない。

*Column* 8

**保津・宮古遺跡**
**第27次**

# （8） 法貴寺斎宮前遺跡 第3次調査

**所 在 地** 田原本町大字法貴寺1596他南側水路
**調査原因** 水路の改修
**調査期間** 2001.1.22～2.8
**調査面積** 105m²（本調査47m²）
**担 当 者** 清水琢哉
**遺 物 量** 12箱

**位置・環境** 法貴寺斎宮前遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。これまで2次にわたる発掘調査が行われている。1次調査では平安時代ごろの礎石建物遺構等が検出されているが、第2次調査では顕著な遺構はみられなかった。今回の調査地は、遺跡の北端にあたる。東側に接して一段高い畑地があり、付近の小字「大庄寺」から、寺院等の存在する可能性も考えられた。

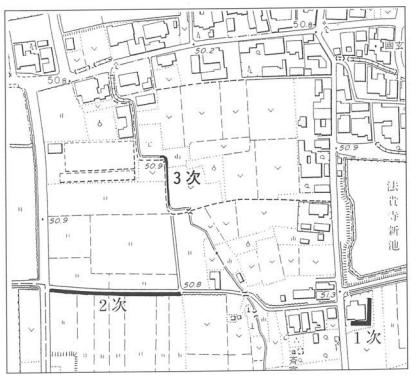
水路改修に伴う調査であるため、調査区は現水路に沿う形で設定された。また、排土処理が困難であるため、検出のみ全面で行い、一部を掘削するのにとどまった。

**検出遺構** 飛鳥時代：河跡1条
中　　世：溝1条
近　　世：溝1条、土坑1基

**出土遺物** 近世の溝より、土師皿・陶磁器、獣骨等多数出土した。土師皿には穿孔のみられるものがある。須恵器・土馬・瓦等の奈良～平安時代の遺物も出土した。中世の溝からは、少量の土師器・瓦質土器が出土した。飛鳥時代の河跡からは、須恵器・土師器が出土した。

**ま と め** 今回の調査では、現水路が18世紀まで遡ることが確認された。また、一部で中世末の堆積層が検出されたことから、前身となる水路があった可能性も考えられる。地元の人によると、この地の北西300mにある唐古池への導水路であるという。唐古池築造に伴い、一部中世溝を利用しながらの水路工事が行われたのであろう。

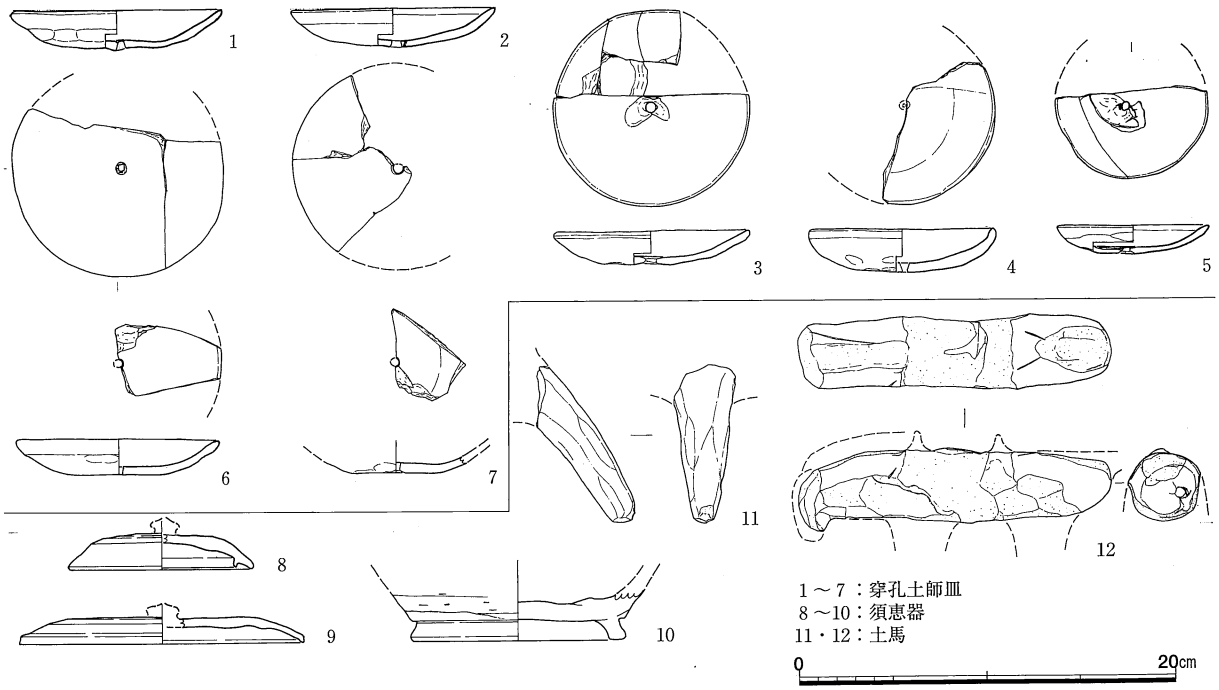
近世水路では、奈良～平安時代の遺物が多くみられた。南東100mの斎宮神社との関連が考えられる。



1．調査地点の位置（1：5,000）

2．調査地全景（南から）

3．近世溝完掘状況（北から）




# 土馬、穿孔土師皿と斎宮神社（寺）

今回の調査では、土師皿の中央に丁寧に穿孔を行ったもの７点が近世溝から出土している（１～７）。

中央に小孔を穿った土師皿は、奈良県北部や南山城、滋賀県南部の墓地で辻ロウソクの請皿として使用する民俗例があることから、本資料も燭台として使用された可能性が考えられる。

ロウソクは江戸時代までは高価だったため、使用される機会と場所がある程度限られていたようである。今回７点もの穿孔土師皿の出土をみたことから、調査地周辺はロウソクを使用する機会の多い場所だったと考えることができる。近世の斎宮寺に近接した立地条件を反映したものであろう。

一方、江戸時代の水路からは、土馬の破片２点も出土している(11・12)。土馬は古代の祭祀の道具で、今回出土したものも飛鳥～奈良時代に属するとみられる。斎宮寺・斎宮神社の名は在原業平に関わる伝承に由来すると伝えられているが、飛鳥～奈良時代の祭祀遺物である土馬が出土したことから、古くから何らかの祭祀行為を行う場所であった可能性を考えることができる。

このように、調査地周辺の特殊な性格を示唆する遺物が、古代・近世の二時期にわたって出土したことは興味深い。

**参考文献**　1980 兼康保明「中世燭台雑考－出土資料よりみた燭台－」『近江文化』12　近江歴史民俗博物館建設後援会

*Column* 9

**法貴寺斎宮前遺跡**
**第３次**

# （9） 法貴寺北遺跡（ほうきじきた） 第２次調査

**所 在 地**　田原本町法貴寺1283-1東側道路
**調査原因**　道路の改良
**調査期間**　2000.12.12～2001.1.10
**調査面積**　113m²
**担 当 者**　清水琢哉
**遺 物 量**　４箱

**位置・環境**　法貴寺北遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。志貴高校建設の建設に伴う事前調査では、弥生時代後期の方形周溝墓２基・壺棺墓２基、古墳時代前期の土壙墓１基などが検出されている。遺跡の南西には弥生時代の大集落唐古・鍵遺跡が隣接しており、両遺跡の間には河道があったことが判明している。このことから、法貴寺北遺跡は唐古・鍵遺跡に伴う墓域である可能性が考えられている。

今回の調査は、遺跡北西部での道路改良工事に伴う上水道本管埋設工事に対する事前調査として行われた。

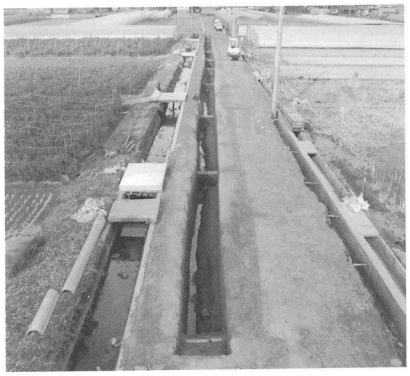
**検出遺構**　弥生時代後期：河跡１条
中　　世：溝１条、土坑１基
近　　世：溝１条

調査地全体が弥生時代後期の河道であった。中世の溝は、深さ0.6m以上の南北方向溝で、東肩のみの検出であった。近世の溝も南北方向で、両肩ともに検出していないため規模は明らかでない。現代の溝も重複しており、中世以来長い期間にわたって水田に伴う水路であったことが判明した。

**出土遺物**　弥生時代の河道からは、弥生時代後期後半～末の土器が出土した。中世の溝からは、信楽系陶器等が少量出土している。近世の溝からは、近世の遺物とともに15世紀頃の瓦質擂鉢や中世陶器等が出土した。遺物が比較的多く、中世集落が近接する可能性がある。

**ま と め**　今回の調査では、本調査地は弥生時代後期段階では河跡内となっていることが明らかとなった。その結果、第１次調査地で検出された方形周溝墓群は本調査地まで及んでいないことが明らかとなった。

1．調査地点の位置（1：5,000）


2．調査地全景（南から）

3．近世溝完掘状況（南から）

# (10) 千代遺跡（ちしろ） 第3次調査

**所 在 地**　田原本町大字千代字南垣内1196
**調査原因**　個人住宅の建築
**調査期間**　2001.1.16～1.19
**調査面積**　19㎡
**担 当 者**　清水琢哉
**遺 物 量**　2箱

**位置・環境**　千代遺跡は、標高52m前後の沖積地に立地する。これまで行われた2次の調査は、先年本遺跡から分離独立した日光寺推定地内でのものであり、千代遺跡内での発掘調査は今回が初めてとなる。

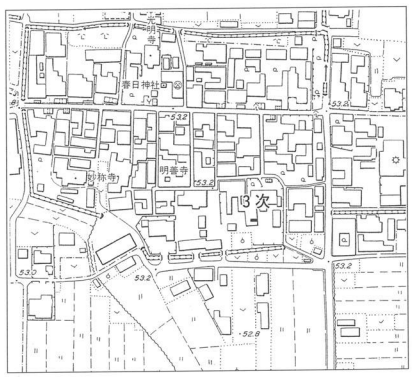
今回の調査地は中世環濠集落の痕跡を残す八条集落東南部である。「八条庄」の名は延久二年（1070）には史料に登場しているが、村落としての八条村がどのようにして形成されたかは明らかとなっていない。わずかに、田堵農民の解文の存在から、12世紀段階での田堵農民による村落共同体の成立が推測される程度である。

**検出遺構**　弥生時代？：溝1条
中　　世？：素掘小溝
中　世　末：大溝1条
近　　世：土坑1基
時期不明：井戸2基

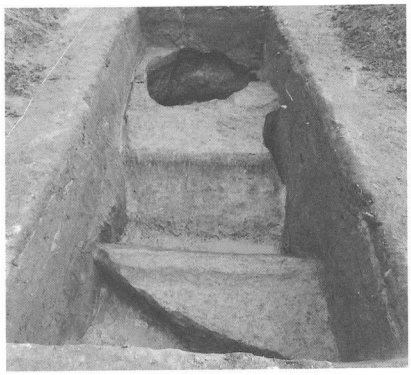
**出土遺物**　中世大溝上層より、瓦質土器、土師器が出土した。

**ま と め**　調査の結果、弥生時代～古墳時代、中世前半、中世後半、近世の各段階の遺構面が存在することが明らかとなった。そして、中世前半まで素掘小溝を伴う耕作地であったことが判明した。また、検出された幅2.5mの中世末の大溝は、断面V字形で防御的色彩をもつが、短期間のうちに埋められたようである。

八条集落内での調査によって、集落の形成過程を考える1つの資料を得ることができた。出土遺物の状況から、14世紀頃に集落が形成された可能性が高い。そして、16世紀頃に大溝が掘削されるなど集落としての発展がみられた。



1．調査地点の位置（1：5,000）


2．調査地全景（西から）

3．中世大溝完掘状況（北から）

# （11） 宮古北遺跡（みやこきた） 第11次調査

**所 在 地**　田原本町大字黒田195-1西側道路
**調査原因**　道路の改良
**調査期間**　2000.11.7 ～12.1
**調査面積**　245㎡
**担 当 者**　清水琢哉
**遺 物 量**　1箱

**位置・環境**　宮古北遺跡は、標高50m前後の沖積地に立地する。これまで10次にわたる発掘調査が行われており、古墳時代前期の集落や飛鳥時代の建物群などを検出している。

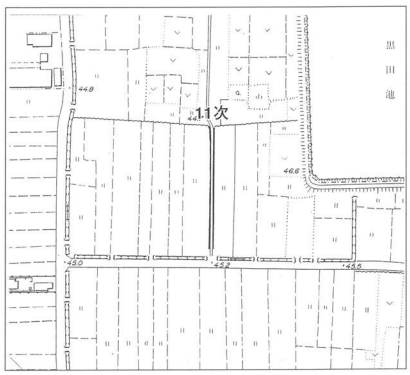
今回の調査は、遺跡北西部での道路改良工事に伴って行われた。

**検出遺構**　中近世素掘小溝群、落ち込み1、ピット1。素掘小溝群は、中世と近世の2時期がある。中世のものは、南北方向の溝のほかに約3mごとに東西方向の溝がある。近世のものは、南北方向のみである。調査区北端で検出された落ち込みは、不定形ながら東西方向に近いラインをもつ。東西方向の溝である可能性も考えられる。北肩を検出していないため幅は明らかでないが、深さ0.3m前後である。遺構床面からは人や牛の足跡が多数検出された。

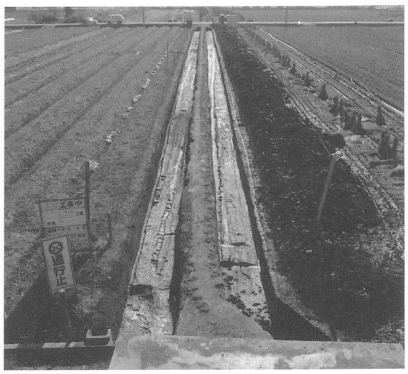
ピットは、1基のみの検出であり、その性格は明らかでない。

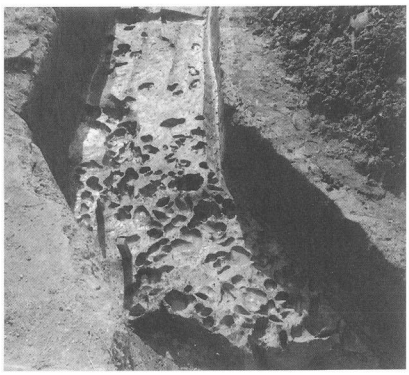
**出土遺物**　素掘溝や包含層からの出土遺物は少ない。落ち込みからは、中世の瓦質土器や土師質土器が出土した。

**ま と め**　今回の調査の結果、遺構密度の低い地点であることが明らかになった。中世以来、耕作地としての土地利用が続いたのであろう。また、北端で検出された落ち込みは、水田に伴う水路であったとみられるが、幅4m以上という規模から、坪境の溝である可能性も考えられる。



1．調査地点の位置（1：5,000）


2．調査地全景（北から）


3．落ち込み完掘状況（北から）

# (12) 法貴寺遺跡 第2次調査

**所 在 地** 田原本町法貴寺字宮ノ前491-1
**調査原因** 個人住宅の建築
**調査期間** 2000.5.30～7.4
**調査面積** 84㎡
**担 当 者** 清水琢哉
**遺 物 量** 42箱

**位置・環境** 法貴寺遺跡は、標高50mの沖積地に立地する。遺跡中央を初瀬川が縦断するが、昭和58年の河川付け替え工事までは遺跡の南・西に接して蛇行していた。遺跡中央には聖徳太子創建と伝えられる法貴寺の塔頭の一つ千万院があり、その南に隣接して式内社池坐朝霧黄幡比売神社に比定される通称天満宮がある。

今回の調査地は、遺跡南西端での個人住宅の建替えに伴う調査である。地元に伝わる絵図では住宅が描かれており、近世以来の屋敷地であることが予想された。

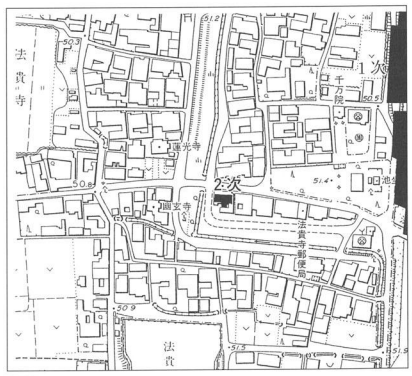
**検出遺構** 中　世：河跡1条、溝1条
近　世：建物、井戸、土坑、小溝
近世末：建物、井戸、土坑、小溝

**出土遺物** 中世河跡上層からは、北宋銭？3点と完形品を含む土師皿が多数出土した。時期は15世紀ごろである。下層からは、14世紀の瓦器などが出土している。

**ま と め** 近世末の建物は、瓦質枠を貯水施設とした漆喰張りの長方形土坑を伴う。おそらく、土間の竈を中心とした施設の一部であろう。建物の南には深さ3m以上の井戸1基がある。下層からは桶枠が、中層からは瓦質枠が出土しているが、検出状況から、桶枠の井戸を後に瓦質枠の井戸として再掘削したようである。

近世後半の建物は、土壁の建物と考えられる。土倉などの可能性がある。

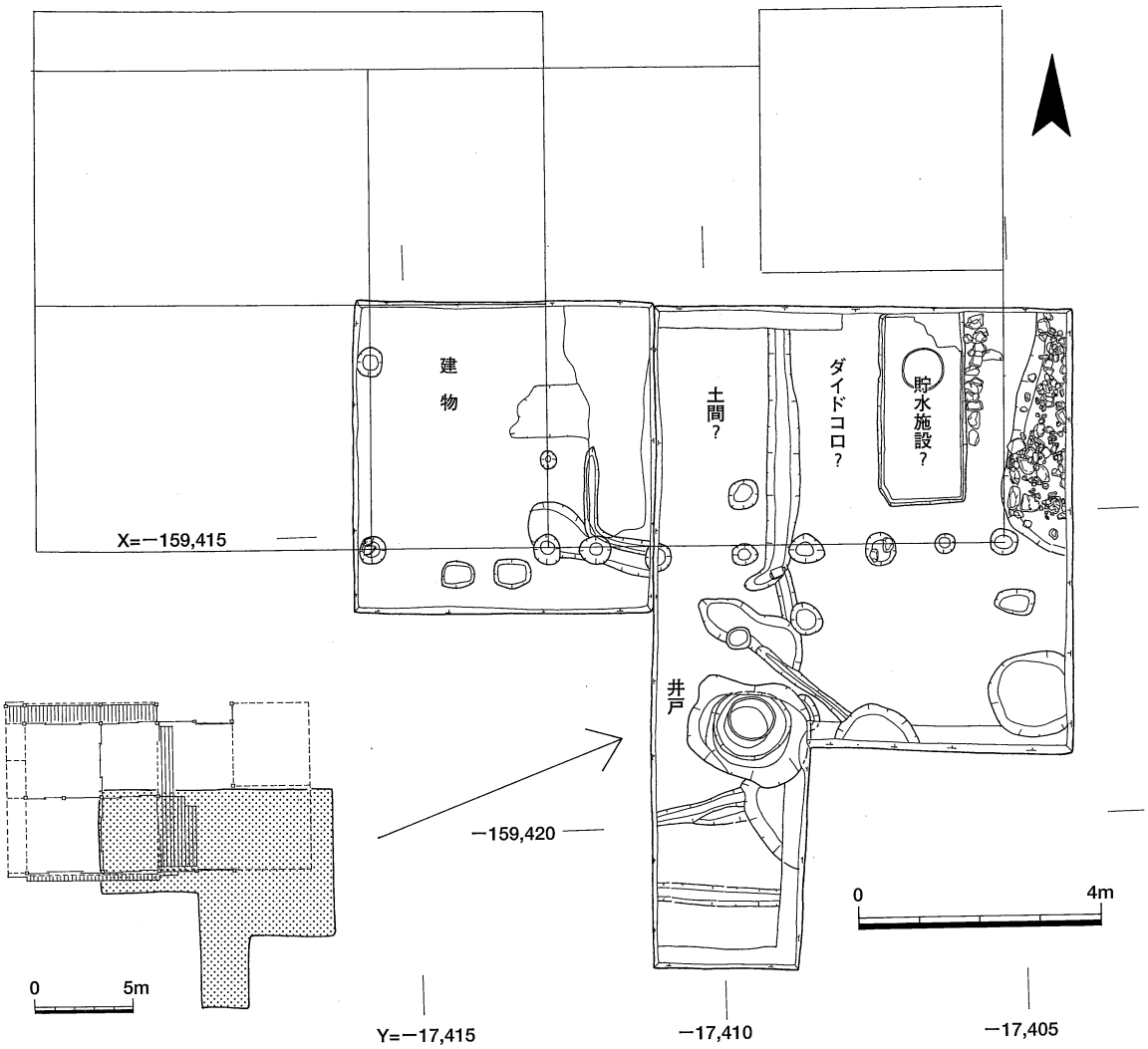
中世の河跡からは、東肩に石垣と溝が検出された。また、上層では完形の土師皿の一括廃棄がみられた。この河跡が、付け替え前の初瀬川東岸になるとみられる。これが近世には河跡の流域が西に移動して宅地となったのであろう。



1．調査地点の位置（1：5,000）

2．調査地東半全景（北から）

3．河跡遺物出土状況西半（南から）




# 近世民家の成立と変遷

中世まで初瀬川河川敷であった調査地は、近世の間に宅地へと変化する。中世末には調査地東端に初瀬川右岸の石垣が構築されるが、その後河川域は狭められ、岸は西へと移動する。

江戸時代前半の状況は明確でないが、後半頃には調査地東端に土壁建物が建築される。建物の南側には井戸や貯水用とみられる土坑が掘削される。幕末頃になると、前段階の井戸を維持しつつ、調査区よりさらに西側に拡がりをもつ建物が建築される。

図は幕末頃の建物跡と、現存する民家から推測される建物の構造である。この復原案では、調査区の大半がダイドコロの南半で、貯水施設等を伴っていたと考えられる。また、一部踏み固められたようなところがあり、土間であったことを推測させる。

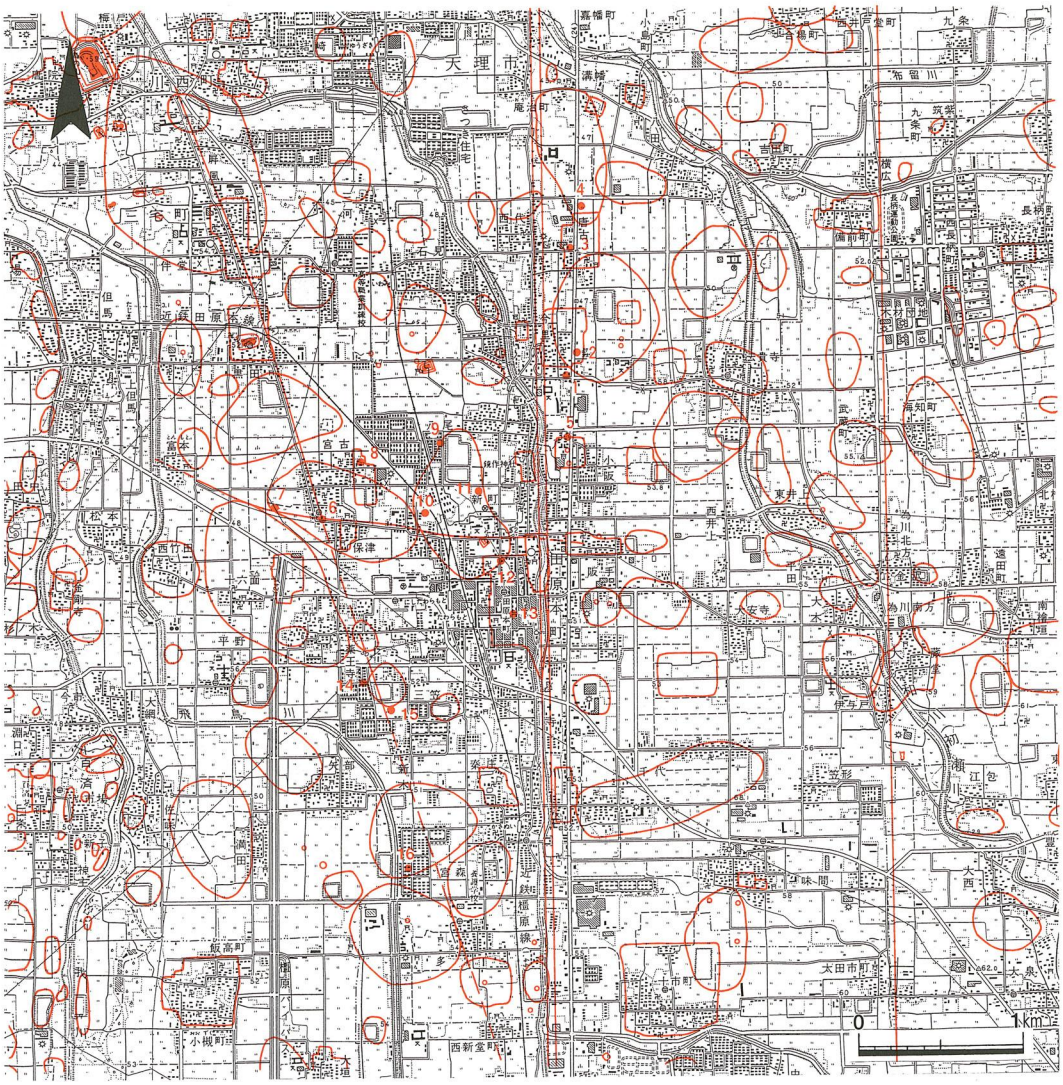
*Column* 10

法貴寺遺跡
第２次

# Ⅲ．工事立会・試掘調査の概要

2000年度に実施した工事立会・試掘調査は、第３表に示したように16件である。このうち、公共下水道工事に伴う工事立会において成果がみられた。これらは、国道24号線沿いに本管がシールド工法によって延伸されるにあたり、そこから派生する支管埋設工事に伴い実施したもので、唐古・鍵遺跡や小阪里中遺跡の一部が該当した。小規模かつ危険な工事であったが、唐古・鍵遺跡では南西側の環濠、小阪里中遺跡では古墳群の存在を確認した。詳細については、以下に述べる。

また、保津・宮古遺跡の道路拡幅・水路付け替えに伴う工事立会では、筋違道の東側道路側溝らしき遺構を確認した。今後周辺での発掘調査によって裏づけていく必要が出てきた。



## 表3　2000年度立会・試掘調査一覧表

| 番号 | 遺跡名 | 調査地 | 原因者 | 工事の目的 | 進達番号(田教文発) | 進達日 | 調査日 | 内容 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 唐古・鍵遺跡(R-200003) | 田原本町鍵地内 | 田原本町長 | 下水道工事 | 37 | 00. 2. 1 | 00. 6. 29～7. 27 | 下水道管埋設の開削工事時に立会。遺跡南西部で環濠・河跡等を確認。 |
| 2 | 唐古・鍵遺跡(R-200012) | 田原本町鍵地内<br>唐古地内 | 田原本町長 | 下水道工事 | 37 | 00. 2. 1 | 00. 10. 19～11. 28 | 人孔掘削時に立会。遺跡南端の大溝1条、中期中頃の土坑1基、中世大溝？などを確認。 |
| 3 | 唐古氏居館(R-200005) | 田原本町唐古地内 | 田原本町長 | 下水道工事 | 37 | 00. 2. 1 | 00. 7. 20～8. 10 | 下水道管埋設の開削工事時に立会。中世大溝・井戸を確認。 |
| 4 | 清水風遺跡(R-200007) | 田原本町唐古地内 | 田原本町長 | 下水道工事 | 37 | 00. 2. 1 | 00. 8. 23～9. 26 | 下水道管埋設の開削工事時に立会。縄文の堆積層あり。遺物ほとんどなし。 |
| 5 | 小阪里中遺跡(R-200006) | 田原本町小阪地内 | 田原本町長 | 下水道工事 | 37 | 00. 2. 1 | 00. 8. 2～11. 7 | 下水道の人孔掘削時・管埋設の開削工事時等に立会。弥生時代の河跡、古墳時代後期の古墳周濠、小阪集落を囲むとみられる近世大溝2条、瓦質井戸枠の井戸、区画溝等を確認。 |
| 6 | 保津・宮古遺跡<br>町番号202<br>(筋違道)<br>町番号203<br>(古代道路)<br>(R-200014) | 田原本町保津<br>167－2<br>北側隣接地他 | 田原本町長 | 水路・道路の改修 | 10 | 00. 9. 29 | 00. 11. 6～12. 8 | 水路改修工事部分で立会。土坑2基、大溝を確認。土坑は古墳時代～古代のものか。立会地西側では現水路とほぼ重複する東南東－西北西方向の溝1条を確認。幅は不明。立会地西端から約30m前後の地点で約5mの大溝を確認。深さ0.5m。筋違道の東側側溝とみられる。これにより推定道幅約22m。立会地東側では、深さ0.5m前後の東西方向？溝を確認。溝の時期は不明。 |
| 7 | 保津・宮古遺跡<br>町番号203<br>(古代道路) | 田原本町宮古<br>4,5,6,7,8,9 | 田原本町長 | 水路・道路の改修 | － | － | 00. 11. 6 | 水路改修工事部分で立会。既に擁壁が立ち上がっており、詳細な層序確認はできなかったが、遺構密度は低い模様。古代道路関連遺構の有無は不明。 |
| 8 | 常楽寺推定地 | 田原本町宮古<br>288－3，289 | 田中　仁 | 賃貸住宅の建築 | 2 | 00. 5. 26 | 00. 9. 11 | 建築予定地内で2ヶ所の試掘坑を設定。顕著な遺構はみられず。 |
| 9 | 羽子田遺跡 | 田原本町八尾<br>430－36 | 中井規夫 | 個人住宅の建築 | 8 | 00. 7. 21 | 00. 9. 1 | 立会時には基礎工事が完了していたため、内容不明。 |
| 10 | 羽子田遺跡 | 田原本町新町<br>376，83－5 | 吉岡康之 | 個人住宅の建築 | 7 | 00. 7. 14 | 00. 8. 29 | 基礎掘削時に立会。客土内にとどまる。 |
| 11 | 羽子田遺跡 | 田原本町八尾<br>664－1 | 支希住宅㈱ | 宅地造成(分譲住宅) | 5 | 00. 6. 23 | 00. 9. 14～9. 25 | 擁壁工事予定箇所に4ヶ所の試掘坑を設定。南端の試掘坑で弥生時代後期後半の小溝を検出。 |
| 12 | 田原本町寺内町遺跡 | 田原本町340－1<br>他 | 寺田君子 | 共同住宅の建築 | 9 | 00. 9. 29 | 00. 12. 12 | 地表より25cmの掘削。客土内にとどまる。 |
| 13 | 田原本町寺内町遺跡 | 田原本町534－2<br>他 | 吉村和彦 | 個人住宅の建築 | 16 | 00. 10. 23 | 00. 11. 24～11. 27 | 基礎に改良杭を用いることが施工直前に判明したため2m×4mの試掘坑を設定した。近世の柱穴検出。中世の沼地状堆積の上に50cm前後盛土して宅地化したとみられる。 |
| 14 | 薬王寺南遺跡 | 田原本町薬王寺<br>150－4 | 尾上賢三 | 個人住宅の建築 | 39 | 00. 3. 29 | 00. 4. 28 | 改良杭による基礎工事のため、地下の状況は不明。 |
| 15 | 薬王寺南遺跡 | 田原本町薬王寺<br>188 | 成平開発㈱ | 宅地造成(分譲住宅) | 31 | 99. 11. 15 | 00. 4. 26～4. 28 | 集水桝設置工事時に立会。深さ2.8mの掘削。時期不明の河跡検出。 |
| 16 | 遺物散布地<br>(11-C-047) | 田原本町宮森<br>100－122 | 川合成彦 | 個人住宅の建築 | 4 | 00. 6. 13 | 00. 7. 10 | 基礎掘削時に立会。客土内にとどまる。 |

# （1） 唐古・鍵遺跡の立会1

**所 在 地** 田原本町大字鍵71－1東側道路他　　**立 会 日** 2000.6.29～7.27
**調査原因** 下水道の埋設　　**担 当 者** 豆谷　和之

**立会の位置**　今回の立会調査地は、唐古・鍵遺跡範囲の南端部にあたる。工事は下水道管の埋設で、国道24号線から田原本北中学校までの東西道路、北中学校東側の南北道路で行われた。本地は鍵集落内であり、これまでほとんど調査は行われてこなかった。今回の調査は、唐古・鍵遺跡の南端部に、幅は狭いものの東西に長いトレンチを入れた結果となった。

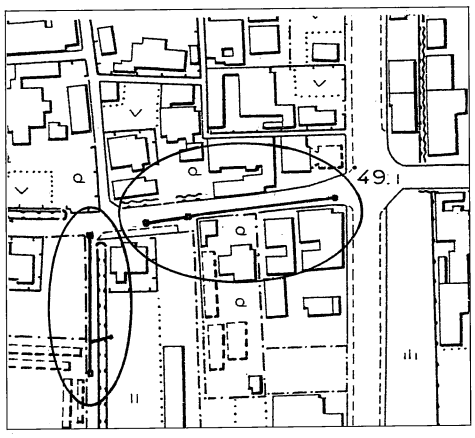
**確認遺構・遺物**　北中学校東側の南北道路では、多くの弥生土器を含んだ古墳時代の河跡1条を確認した。顕著な遺構はなく、唐古・鍵遺跡の範囲外と考えられた。

国道24号線から田原本北中学校までの東西道路では、南東－北西に軸をもち並行すると考えられる3条の大溝を確認した。このうち、東側の2条(ＳＤ－102･103)は、環濠である可能性が高い。この2条の大溝からは、弥生時代後期初頭の土器が出土している。

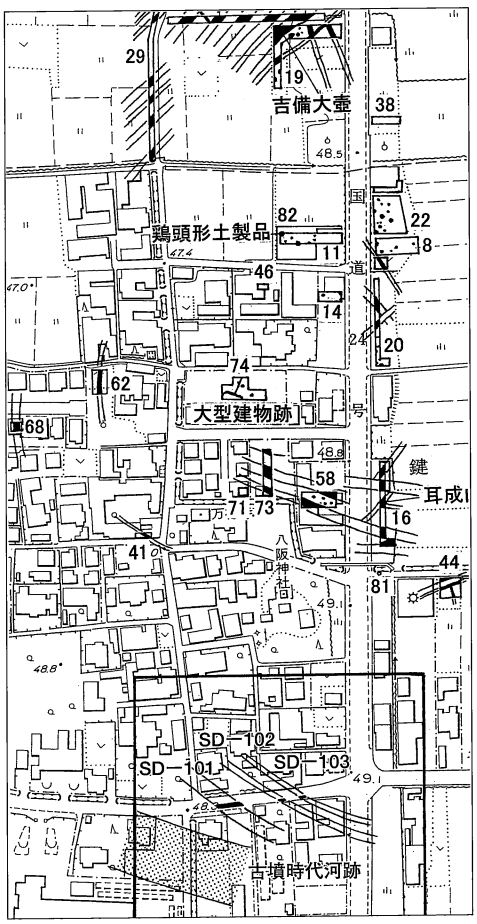
一方、最も西側の大溝(ＳＤ－101)は、その軸がやや西に振れており調査区に平行するためか検出幅が16mもあり、河跡の可能性もある。その下層の暗灰色砂層には、弥生時代中期後半の土器を多く含んでいた。

なお、これらの大溝群より東側では、安定した黄褐色粘質土の堆積が認められた。黄褐色粘質土は、弥生時代前期以降の遺構検出面になると考えられ、今回の調査でも土坑1基を確認した。

**ま と め**　今回は、下水道管の埋設に伴う立会であり、掘削幅が狭いことや夜間作業となったことなど不充分な面もある。しかし、これまでほとんど情報のなかった、唐古・鍵遺跡の南西部側において環濠を確認し、その範囲を明らかにしたことは大きな成果といえよう。




1．立会地点の位置（1：2,500）
（R－200003）




2．唐古・鍵遺跡における位置（1：4,000）
（R－200003）

# （2） 唐古（からこ）・鍵（かぎ）遺跡の立会２

**所 在 地**　田原本町大字唐古61-1他　　**立 会 日**　2000.10.19～11.28

**調査原因**　下水道管の埋設　　**担 当 者**　清水　琢哉・豆谷　和之

**立会の位置**　今回の工事立会地は、唐古・鍵遺跡の中央を縦断する国道24号線西側歩道の西沿いで行った。工事は、推進工法によって埋設されている下水道本管に、私有地内からの支管を接続するものである。1カ所の掘削規模は、２m×２mと小さいものであった。しかし、その工区は、北は楼閣駐車場前から南は鍵交差点までの延長560m、14カ所に及んだ。

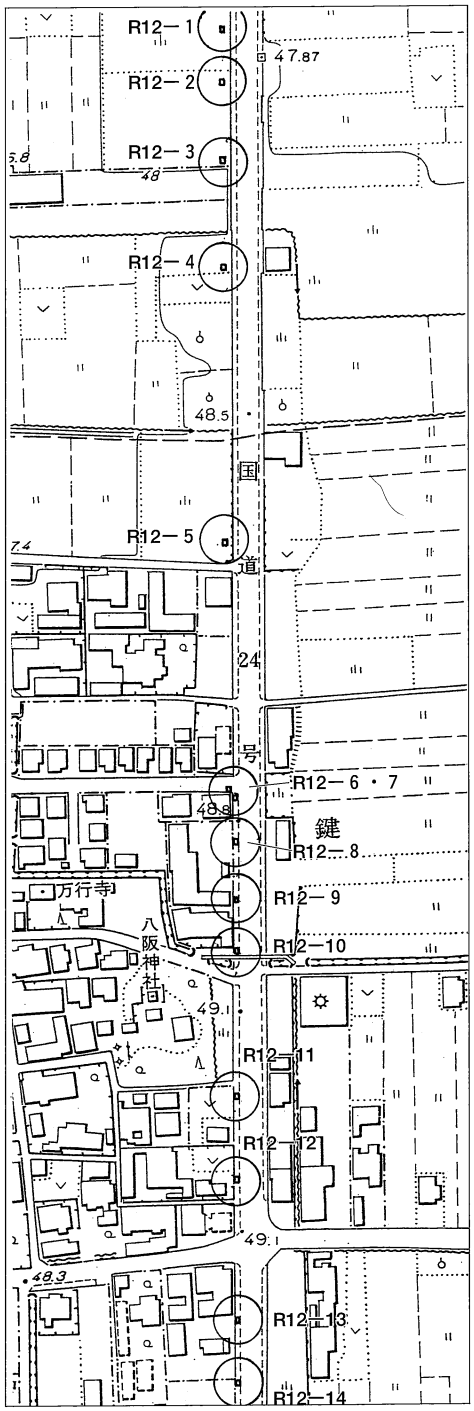
**確認遺構・遺物**　調査は遺跡の西側を縦断するため、それぞれの地点において土層堆積状況や確認される遺構の性格が異なる。このため、北側環濠帯部分となる楼閣駐車場前付近、遺跡内部となる第11次調査地付近、これまで実態の不明であった鍵八坂神社付近、南側環濠帯部分となる鍵交差点付近の４地区に分けて説明する。

**楼閣駐車場前付近**　環濠と考えられる落ち込みを、R12-２地点とR12-３地点の２ケ所で確認した。それぞれは唐古・鍵遺跡第13次調査のＳＤ－04・06に対応すると想定される。

**第１１次調査地付近**　第11次調査地の東側R12-５地点において、土坑と考えられる落ち込みを確認した。

**鍵八坂神社付近**　鍵陸橋のR12-10地点において、籾層をもつ土坑を確認した。工事掘削範囲において、その南西端で土坑肩を確認したが、それ以外は土坑堆積土であった。

**鍵交差点付近**　鍵交差点の南側R12-13地点において、西北西－東南東に軸をもつと考えられる溝状の落ち込みを確認した。弥生時代後期の土器を含んでいた。その方向性から、鍵の立会１で確認したＳＤ－102と繋がり環濠になる可能性がある。




１．立会地点の位置（1：3,000）
（R－200012）

# （3） 唐古氏居館推定地の立会

**所 在 地** 田原本町大字唐古527北側道路他　　**立 会 日** 2000.7.20～8.10
**調査原因** 下水道管の埋設　　**担 当 者** 豆谷　和之

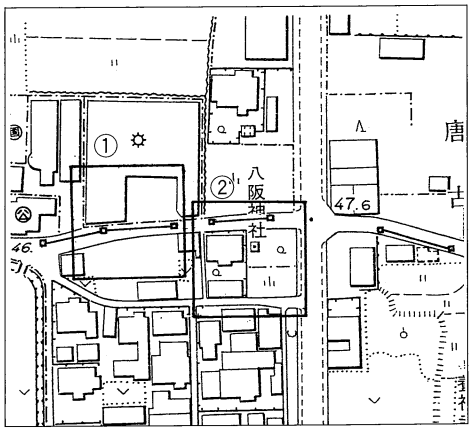
**立会の位置**　今回の立会調査地は、唐古・鍵遺跡の遺跡範囲をやや北側に外れた東西道路であり、中世遺跡の唐古氏居館推定地内にあたる。調査地は東西に長く、また途中には国道24号線を挟んでいる。

**確認遺構・遺物**　国道24号線から東側の調査地は、中世あるいは近世の瓦質土器を含んだ青灰色粘質土層が拡がっており、安定した堆積層を認めることはできなかった。河川あるいは大溝の埋積土と考えられる。

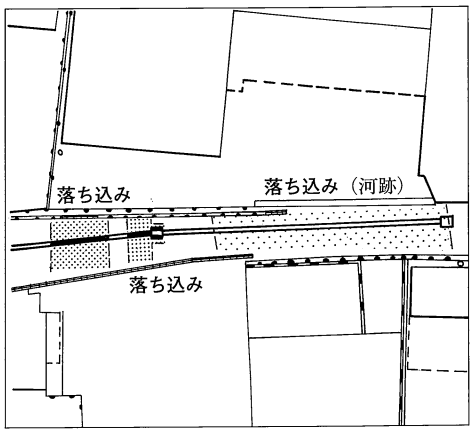
国道24号線から西側の調査地では、中世遺物を含んだ南－北に軸をもついくつかの落ち込みを確認している。なかには、上面の検出幅が20mを超えるものもある。これらが、自然物か人工物かは明らかにしえなかった。このなかにあって特筆されるのは、現八坂神社北側での居住区を示すと考えられる遺構の確認である。

八坂神社北側において、マンホール設置のため2.2m×2.2mの掘削を行ったところ、現道路面より深さ1.4mで、近接しあう中世井戸を2基検出した。掘削ほぼ中央で確認した井戸は、径35cmの曲物を重ねていた。曲物は上面の1段のみ抜き取ったが、下段は未調査のまま埋め戻された。この北側にあったもう1基の井戸は、上面で円弧を描く木材を確認したが、マンホール穴縁辺であったため掘削が及ばず未調査のまま埋め戻された。また、この井戸より西へ約14mの位置で、南－北に軸をもつ幅約4mの大溝を検出した。

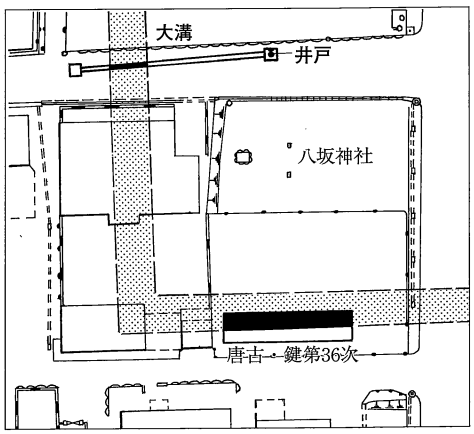
**ま と め**　八坂神社に接して、井戸と大溝を確認した。八坂神社の南側で行われた唐古・鍵遺跡第36次調査では、東西の中世大溝が検出されている。唐古氏居館推定地内には、現八坂神社を中心とした小区画があった可能性が想定される。



1．立会地点の位置（1：3,000）
（R－200005）



2．遺構配置図①（1：800）



3．遺構配置図②（1：800）

# （4） 清水風遺跡の立会

**所 在 地**　田原本町大字唐古296-1東側道路　　**立 会 日**　2000.8.23～9.26
**調査原因**　下水道管の埋設　　**担 当 者**　清水　琢哉

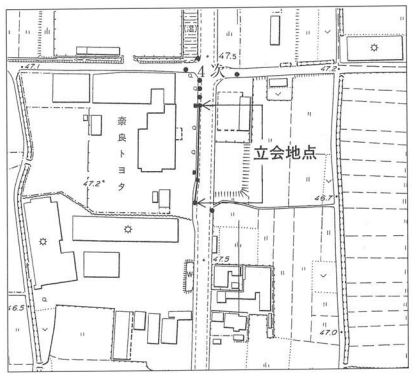
**立会の位置**　清水風遺跡は、標高48m前後の沖積地に位置する。これまで4次にわたる調査が行われている。第1次調査では、弥生時代中期後半の河跡から多量の絵画土器が出土したほか、弥生時代中期の方形周溝墓や水田の可能性のある遺構などが検出された。第2次調査では、第1次調査で検出した河跡の上流側を調査し、やはり多量の絵画土器の出土をみた。また、河跡とほぼ同時期の掘立柱建物跡、弥生時代後期後半の方形周溝墓などを検出した。

平成12年度に行われた第4次調査は、今回の立会箇所と一連の下水道工事に伴う調査である。この調査では、中世の土坑等を検出したほか、縄文時代晩期頃の包含層を検出した。

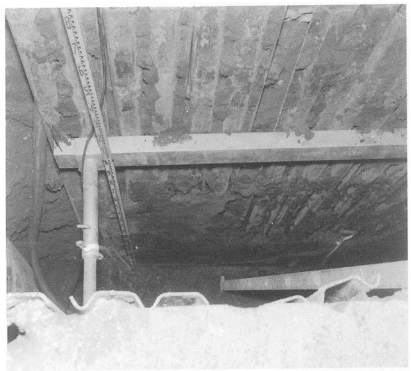
今回の工事立会は、この第4次調査地点に設置された人孔を繋ぐ開削工事に伴って行われた。縄文時代晩期の包含層を検出した地点付近での工事であることから、その続きが確認できることが予想された。

**確認遺構・遺物**　顕著な遺構を検出することができなかった。ただし、先述の縄文時代晩期包含層と同一とみられる黒褐色粘質土層を確認した。土器片1点のみの出土で、縄文土器の可能性があるが正確な時期は明らかでない。

**ま と め**　今回の立会箇所では、弥生時代の遺構・遺物を確認できなかった。これは第4次調査の成果を追認するものである。また、中世遺構も顕著なものはないと思われるが、夜間を中心とする立会の限界から詳細は不明である。唯一成果といえるのは、縄文時代包含層の続きを確認したことであるが、これも面的にその拡がりを把握するには至っていない。



1．立会地点の位置（1：5,000）
（R－200007）


2．立会状況（東から）

3．立会状況（東から）

# （5） 小阪里中遺跡の立会

**所 在 地**　田原本町大字小阪82-1東側道路他　　**立 会 日**　2000.8.2～11.7
**調査原因**　下水道管の埋設　　**担 当 者**　清水　琢哉

**立会の位置**　小阪里中遺跡は、標高49m前後の沖積地に位置する。これまで4次にわたる調査が行われており、弥生時代の集落跡、古墳時代後期の古墳群、中世・近世の屋敷地や溝跡跡などを検出している。第1次調査で検出された円墳は6世紀の築造で、直径21.5mをはかる。第4次調査でも古墳とみられる溝が検出されている。

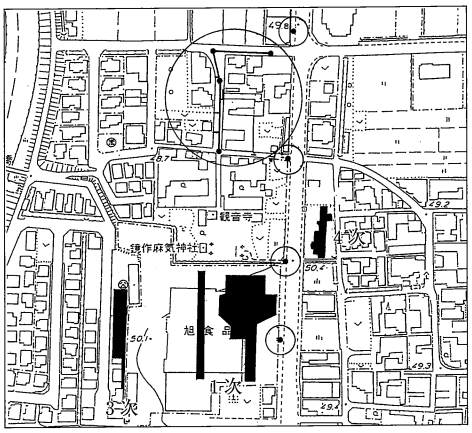
今回の工事立会は、下水道工事に伴うものである。国道24号線沿いは基本的に推進工事であるが、人孔部分のみ開削工事になる。また、国道西側の小阪集落内での工事は開削工事であるため、開削部分において工事立会を行った。

**確認遺構**　主な遺構は、集落内での開削工事部分で確認した。確認した遺構には弥生時代後期～近世の各時期のものがある。近世の遺構は、小阪集落の区画溝とみられる大溝2条、瓦質枠の井戸1基、幅2m前後の溝2条である。古墳時代の遺構は、古墳の周濠とみられる溝3条である。弥生時代の遺構は、後期頃の落ち込みである。

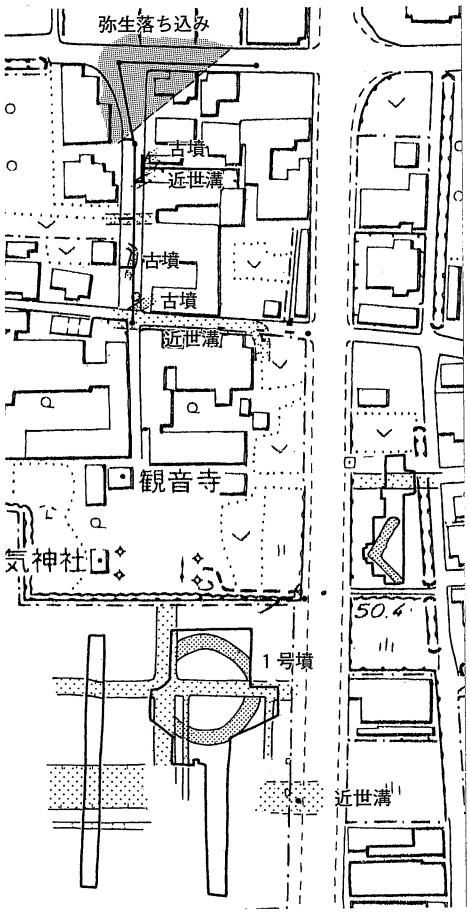
**出土遺物**　古墳からは、円筒埴輪・朝顔形埴輪・家形埴輪などが出土した。近世大溝からは、土師器・陶磁器などが出土した。特に小阪集落の北側の大溝ＳＤ－01からは18世紀～19世紀の遺物が出土した。

**ま と め**　今回の調査では、小阪里中古墳群の一端を知ることができた。鏡作神社よりもさらに北側に古墳群が拡がることが確認されたことで、遺跡範囲も北側に拡張する必要が出てきた。

近世大溝については、第1次調査で検出されている小阪集落の環濠とは一連のものになると考えられる。近世小阪集落の構造を考える上で重要な成果であったといえよう。



1．立会地点の位置（1：5,000）
（R－200006）



2．検出された遺構（1：2,000）

# （6） 保津（ほつ）・宮古（みやこ）遺跡の立会

**所 在 地**　田原本町大字保津167-2北側水路
**調査原因**　町道・水路の改良・改修

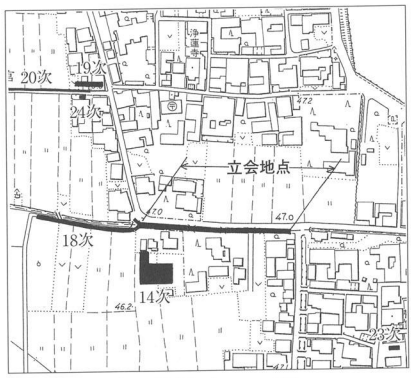
**立 会 日**　2000.11.6 ～12.8
**担 当 者**　清水　琢哉

**立会の位置**　保津・宮古遺跡は、標高48m前後の沖積地に立地する。古代道路跡である筋違道が遺跡を縦断し、これと交差する奈良時代前後の東西方向の道路跡が遺跡を横断する。

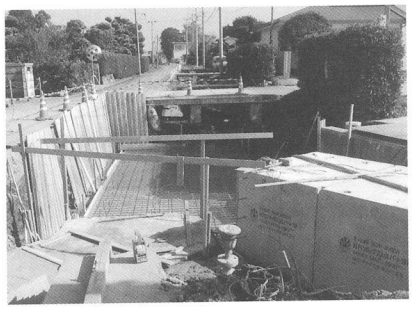
立会箇所は、東西方向の古代道路跡に重複する現道路上に位置し、工区の西端では筋違道と交差している。古代交通路を探る上では重要な地点である。

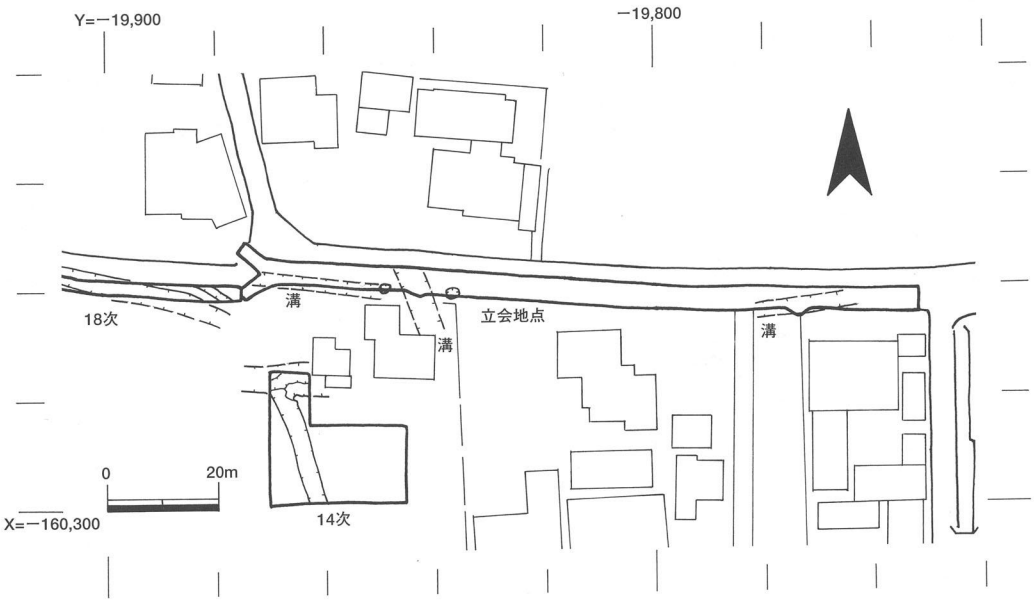
**確 認 遺 構**　弥生時代
～古墳時代：土坑？1
古　　代：土坑1、溝3

**ま と め**　立会の結果、筋違道東側側溝とみられる溝が断面観察で確認された。第14次調査で検出された筋違道西側側溝とあわせて考えると、筋違道は幅22m前後の道路であった可能性が考えられる。また、古代とみられる東西方向の溝状遺構を調査区の西側・東側で確認した。



1．立会地点の位置（1：5,000）
（R－200014）


2．立会状況（西から）



3．検出された遺構（1：1200）

**田原本町埋蔵文化財調査年報10**
2000年度

平成13年３月30日

編集発行　田原本町教育委員会
印　　刷　明新印刷株式会社